

CENTRAL TRUTHS  
OF  
CHRISTIANITY  
Rev. J. C. Ambler.

基督教の大真理

明治廿八年五月  
ペンソングラフ  
ト出版舎

耶穌降生千八百九十五年

020502-000-1

特18-462

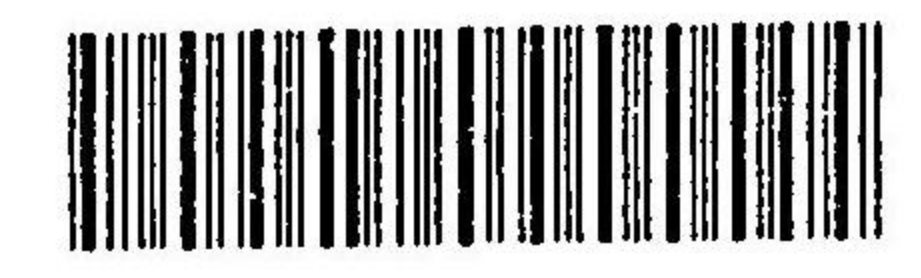
基督教の大真理

アンブラー/著

1冊

M28

ABI-0313





GENERAL TRUTHS  
OF  
CHRISTIANITY  
Rev. J. C. Ambler.

基督教の大真理

耶穌降生千八百九十五年



明治廿八年五月  
メソヂェスト出版舎



## PROSPECTUS.

The following series of five tracts are supposed to cover some of the most essential doctrines of the Christian religion in the department of Christology. They are published largely with reference to inquirers of the thinking class, who have been in a way affected by some general facts concerning Christianity, but wish to make a more thorough investigation before finally committing themselves to any decided action with regard to it. It is also hoped that they will serve in helping to build up and restore the faith of those who have become half-hearted. They are written in easy colloquial in order that they may be accessible to all. It is hoped that the order, if followed, may produce such an impression as that in the end he who has reverently and fully examined them, may be enabled to say with doubting Thomas, "My Lord and my God."

J. C. AMBLER.



## THE LOVE OF GOD.

This first tract in the series is proposed with the wish that this treatment of the reason and purpose of the Incarnation of the Son of God may so commend itself to thinking minds as to prepare the heart for the separate treatment of the themes which are to follow. No originality is claimed either for the form or the setting of the argument, nor are any apologies offered for the fact that it may not accord with what are called more modern modes of thought on the subject. The narrow limits prescribed make it difficult fully to present a subject capable of so much expansion. It is hoped that enough is contained in this tract at least to awaken interest and create appetite for those which follow.



## 總 說

此の五冊の小冊子は基督學に關する基督敎の要理の幾分を説き尽せしものと思はる。

此書は基督敎の一般の事實に就ては感動する所あるも尙ほ基督敎に對して最終の決心をなすに至るに先ちて一層充分に研究する所あらんとする求道名諸君の爲めに出版するものなり又信仰冷淡とありたる人々の信仰を確立し回復する爲め幾分の益あらんとは是れ著者の希望あり之を記するに俗語を以てしたるは一般の人々に解し易からしめんとするに由る希くは此の書を引續きて閱讀する人敬虔に充分に調査を遂げたる後終に彼の狐疑深きトマスと共に

「我主よ我神よ」

といひ得るほどの感動を生せんことを。



第一

神之愛

此卷は神の子の世に降り給ひし道理と目的とを論述するものにして、  
豫め是れより以後の四冊を閱讀せられんとする思想家の心を開拓し  
置かんとするものあり議論の体裁序次に就ては余敢て新機軸ありと  
いはず又此の問題の新説に關し敢て反論を試むるものにもあらざる  
なり本書は紙數に限りありて此の多端の問題を詳説するには自ら困  
難ありきされど少くとも以後の四冊に對する希望を興奮し嗜好を起  
そには充分ならんと是れ著者の希望をる所あり。

神の愛

アンブラー述

約翰傳三章十六節にそれ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世の  
人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡るること無くして永生を  
受しめんが爲ありとありますが此言詞に據りてお話を致しませう昔  
猶太國の司人はニコデモといへる人あり此人が或日主イエスの許へ  
参りて其教のことにつきあなは如何なるか方にて如何ある目的あ  
りやと尋ねました抑此ニコデモといふ人は猶太人の中にて身分も高  
く學識も博く且其志他の猶太人と同じく救主のれ出を待て居り  
ました猶此ニコデモを初め其他猶太の人々の考に其救主の一朝此世  
へお降りにならば年來羅馬人が壓制にも忽ち打勝ことが出來て



舊時猶太の隆盛なりし時代よりも猶繁盛になるべしと思ひ設け且又主イエスが毎々驚くべきお話や不思議な御所爲など熟思して真に久しく待れたる救主ありと考て居りました又エササレムと云ふ都より或權勢ある人々を遣はしてパプテスマの約翰の性質と品行とを取調べさせましたが其使が歸り來りてサンペドリムといふ猶太の宗敎會議に復命を致すに當りニコデモの疑念が一層強くなりました元來ニコデモも其集會の議員でありまして其遣はされたる人々の話を聞きましたがさて其人々の話は如何なることであるかといふにパプテスマの約翰といふ人の言はるるやう我はキリストにあらずされど汝等が知らざる所の者一人汝等の中に立りと此の知らざる所の者と申すのは即主イエスキリストを指したのであります抑ニコデモの目的に主イエスが全く神様より送られたる証據物であ

ると正しく保証することが出来るからば其主イエスと共に戦争の始まる事に就て御相談を願ひ度き旨を述べました然るに主イエスキリストは大層智慧のある方なる故ニコデモに向て尤も上手に答をなさいましたを以て其次手に段々として誘導なされ終にイエス御自身の眞正の目的即人間の中には戦争を起す積りでないといふことを逐一お示しなされ加之御自分の天國といふ所へ行かんとするには人間の心の中なる有様を改めねばならぬといふことを詳に仰られま

たこの時主イエスキリストの御心がニコデモの心の底に能く貫き是迄自分の心に犯した罪の爲に天國へ行くべき望の絶たることを悲しみつと言わらしぬ尤もニコデモは最初主イエスキリストの世をお救ひなさると御目的に就て種々議論したと思ひ居りしが段々進んで自



分が尋ねることの關係に就て明に導れました。即聖書に書てある辭に依るに。ニコデモが答ていへるやう。如何で此事あらんやと。諸兄弟姉妹たちの中に。ニコデモの如く。御自分達の御利益の爲。基督教の道を。お求めあさるゝならば。主イエスが。ニコデモに向て。優しい隣れある。れ話をあされたれ辭を。れ聞せ申しませう。

主イエスのお話の聖書に書てある意味に據るに。人間が救はれたく思は。先一番に。眞誠の神の獨子を信すること。が肝要でござんす。抑救のこと。信仰のこと。を比較るに。決して別物ではありません。丁度我々が食事する間にも。我々の身体を強めるが如く。少しも間斷なく。主イエスキリストを信するならば。直に神のれ救ひだの。お恵みだのを。被りて。信仰は。彌々益々堅固になります。

諸進んで。約翰傳三章十四節十五節に至りますと。この言詞が書てあり

ます。曰く。モトモ野に蛇を擧し如く。人の子も擧らるべし。凡て之を信する者に。亡ること無くして。永生を受しめんが爲なりと。そもこの言詞の意味は。如何なる譯ぞといふに。太古猶太人が。原野に迷つて居りました時分。その人々が犯したる罪のため。に神罰を受けて居りました。が。その罰は。毒蛇とありて。現はれ出で。其人々の内へ。這入り。酷く齧付きました。そこで。モトモといふ人が。神様に祈り。銅を以て。蛇の形を造り。これを棒の先へ。掛け示したるが。彼毒蛇に。噛れた猶太人は。其銅の蛇を見ると。忽ちその傷所が癒りました。その銅の蛇は。即神の功験であります。が。それと。同く。我々も。主イエスキリストを信する時は。矢張其通りの救を被ることが。確に出来。我々人間が。主イエスキリストを信するならば。其信仰は。私共の救ひとなる道理であります。夫故に。多くの罪を犯したる人々も。主イエスキリストは。全世界の救主であるといふことを。心に期



し心に信じ神の掟に従ふならば疑もあらず神様の免しと。永生の樂を  
 被るは勿論でございます。夫より段々進んで左の如き慈愛と慰のお話を成さしました。曰く神は  
 其の生給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛み給へり。是は神を信する者  
 に亡る事なくして永命を受しめんが爲めなりと。このお詞に就て愛  
 する兄弟姉妹達をはじめ、基督教の神様の性質に就て今日まで我々共  
 の考へは如何でありましたらう。私共若し實際に聖書にかいてある  
 事柄をその儘受ましたならばその幸福は何程でありませうぞ。實に量  
 り知られぬ事は勿論でございます。或人の話に主イエスが此の世へ  
 降り成されて人間の罪に代りお死なされた時に我々人間に向つて  
 深きお恵をお取次おされて下されたのだと申しました。又或る他の人  
 の話に主イエスが死なされた時我々人間の犯した罪の代りに神の

怒を御引受下されたと申しますが夫故に世間の人は考違ひをして聖  
 書にかいてある基督教の神様は恨み深くして和がざる短氣お方と  
 思ふとがあります。併我々人間が懼しい神罰を受けざる時は人間と神  
 様と決して和ぐことは出来ませぬ。それだに依て主イエスキリストは  
 恰も人間の仲裁人の如くに其の犯した罪の苦みをお引受下さるやう  
 に成つた譯で。それに就て神様や贖主の務に就て斯様なる言より聖書  
 に書たことと全く違つて参つたのであります。抑聖書の中の或る部分  
 と又他の或る部分に書てあることを比較すれば前の説は全く消滅し  
 て仕舞ひます。夫ですから主イエスキリストは此様に働さ成さいま  
 した間に神様は天に存在する人間の父様であると仰せられ。又聖書に  
 書てある神様と此の間違ひなる話とを比較すれば其の差別は丁度偶  
 像教の懼しい鬼だの。又うの他木石にて造られた物と基督教の慈悲お



る父。全能なる神の功験とが目に見ゆるのと能く似て居ります。愛する諸君よ。諸君は今日ここに擇びし題意をよく御熟考下さるやうに願ひます。即ち神はその生たまへる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり」といふ言でございまして。こは神の獨子なる主イエスキリストの御言でございませす。

抑我等人間に對する神様の愛の教については舊約全書の創世紀より新約全書の黙示録に至るまで始終一轍に貫ひて居りまして神様の眞誠なる御性質やお目的を人間に悟らしむるため色々様々な比喩を以て示し下されました。その事のモーセお向つて神様が話しなされた御言にて其だ明瞭でございませす。即ち出埃及三十四章六節にエホバ即ち彼の前を過ぎて宣べたまはく。エホバ。エホバ。あはれみあり。恩恵あり。怒るとの遅く。恩恵と眞實の大なる神恩恵を千代までも施し。惡と過

と罪とを赦すものとありませす。又創世紀六章六節に。ここに於てエホバ。地の上に人を造りし事を悔て心に憂ひたまへり。又詩七篇十一節に。神は正しきさば。人日毎にいさどほりを起したまふ神ありと。ありませす。が。この諸説を能く考へて。覽なさい。總て神様の愛の深い証據が能くおわかりになりませす。如何とあれば神様は我々愚なる人間の心に了解安い話を爲されんがため。初から人間の弱くして。力のない有様を。お考になりませして。斯様あるれ辭を。用ひあされた譯であります。約翰傳三章十六節に。神様の獨子イエスキリストが自ら此世へお降りあされませしたれ目的をいひあらはしてございませす。そのれ言は即ち今日の題といたしたる神はその生たまへる獨子を賜ふは。世の人を愛し給へり」と申すのでございませす。實に神學に依りて考ふるに。救の源は神の愛でございませす。舊約全書を能く讀ぶれば。人間の一番初の



十  
祖先はアダムとエバといはれましたが。この人々が罪を犯せし罰によ  
りて。神様の前から追出され。その後その罪即悪しき行や悪しき思ひが。  
人間の心の裏に遺傳いたしましたけれども。神様は。禮式や約束や預標  
や。証據や。豫言などを以て人間の心を既に倒れたるより引戻し。段々と  
造主に近づかしめ。救の道を得るやうになされ。且主イエスキリストは。  
最初人間が罪を犯したころ直にお降りなされ。あいのも。後の人々のた  
めを深く慮りてのことわざいいます。抑々舊約全書をよく調べますれ  
ば分ります。が。神様は。時機の熟するを待ちたまひて。その獨子を下し  
たまひ。又救主は名もなき賤しき下僕の形ちを取りて。この世に下りた  
まひました。かく神の獨子イエスキリストは。人間の形ちを以てこの世  
へ御降世あされ。自ら謙りて柔順に。その務を完了せられ。終に十字架に  
死したまひました。哥林多前書十章十一節に。彼等が遇る。此すべての事

は鑑となれり。且これらの事を録されたるは。末の世に遇る我儕を警む  
る爲なりとあります。されば自ら立てりと思ふものは。倒れざる様に慎  
むとが肝要であります。又我々は舊約全書に書てある教を能玩味すれ  
ば。大層利益にあります。加拉太書四章四節に曰く。然れども。期既に至る  
に及びて。神の子をつかはし給へり。彼は女より生れ。律法の下に生れ  
たり。是律法の下にあるものを贖ひ。我儕をして子たるとを得せしめん  
が爲なりと。又腓立比書二章五節より九節までに曰く。爾曹キリストイ  
エスの意を以て意とすべし。彼は神の体ちにて居りしかども。自らその  
神と匹くある所のこととを棄難きことと。意はず。反て己を虚らし。下僕の  
貌を取りて。人の如くあれり。既に人の如き形狀にて現れ。己を卑くし。死  
に至るまで順ひ。十字架の死をさへ受くるに至れり。又主イエスは。約  
翰傳十四章九節に。我を見し者は。父を見しなりと仰せられ。主イエスが



此世の爲にか働きなされた間唯恵ある神様の愛をのみお現はしにな  
 りましう。馬太傳十二章二十二節に曰く眞道をして勝どげしむるまで  
 は傷める草を折ることなく烟れる麻を熄とあしと。這は主イエスが小  
 なる信仰を育るの意味をいふのであります。又主イエスのれ弟子達の  
 話に神は肉体となりて我儕の体に宿れり。我儕その光榮を見るに誠に  
 父の生給へる獨子の形狀にて眞誠に恩恵と眞實とにて填塞せりと。之  
 によりて考ふれば主イエスのお話に依て天に居す我儕の父様は憐恤  
 深いお方であつて人間を何所までも愛し下さるゝことが分ります。  
 或人の話に聖書を能調ふればキリストが死したまへるは神様を人間  
 に愛させたまへる爲めにあらずして神様が人間を御愛し下さるゝか  
 らである。と申しました。が實に主イエスの贖は神様の愛の結果の現は  
 れたのでございませう。爰にこの説を証する爲その例証を聖書の中より

舉ませう。羅馬書五章八節に然とキリストは我儕のなを罪人たる時我  
 儕の爲に死たまへり。神は之によりて其愛を彰し給ふと。又約翰第一書  
 四章九節十節に神はその生給へる獨子を世に遣はし我儕をして彼に  
 由て生を得しむ。是に於て神の愛われらに顯れたり。我儕神を愛するに  
 非ず神われらを愛し我儕の爲に其子を遣して挽回の祭物とせり。是即  
 愛なりとあります。此等の條を見ますと主イエスの贖は神様の怒を  
 宥る爲に。此世へお降りになりました様に見へまして聖書の説と全く  
 反對して居るやうに見えます。から更に他の道理を尋ねなければな  
 りません。羅馬書三章二十五節二十六節に斯様あるとが書てあります。  
 曰く神はその血に依りてイエスを立て信するものゝ挽回の祭物とし  
 給へり。そは神忍びて過越し方の罪をゆるやかにし給ひしかと。今その  
 義を彰はさん爲。即イエスを信する者を義とするとも尙ほみづから義



たらんが爲ありと抑神様の性質を考ふれば實に完全無欠にしてその造られた人間も矢張り真正や義や慈悲などがなくて叶はぬものでありまするが併し我々人間は毎日の生活と行ひとによりこの必要なる律法を破りてその犯せる罪のために神様から罰を受けねばならないやうになりその罪の爲めに死すべきものとありましたこの人間が罪を犯した有様を明にお知らせ申す爲に今比喩を以てお話を致しませう先某の社會の法律に向つて罪を犯したとを考てごらんおさいその害を被つた人は慈悲深いなさいける人でございまして裁判所へ行き罪を犯したる人の爲めに憐みや思ひ遣りや赦免の事を申し出しても裁判官は逆も悪人の罪をゆるしません何故おれば裁判官はこの悪人が訴へ出たる人を害した計りでなく此國の法律を破りたるに依り勿論相當の罰を申し付ねばならぬといふ定めである故ですさすれば此

の罪人は人間の法律を破りましたから據なくもその法律に従ねばかりませんこの比喩をアよく考へてごらんおさい人間社會にいて賊に墓おき法律でさへも罪を犯せばその罰を受くるのが當然なるにまして至善至正なる神様の完全なる法律を犯した人間の罪をそのまゝ赦される筈はございせん神様は罪を犯せる我々人間をお愛し下さつてもうの至き御性質によつて完全なる義なる正しい点より人間の犯した罪をうの儘に御赦しなさることが出来ないのをごさいます左様いふ有様もある或る書物を編輯せし人の説にも思はる神様が種々様々御工夫をおさつて漸く人間の救を御とげなされたと申されました今その御工夫を能く考へますると神様が法律を誠である証據立をなされた計りでなくその掟を破つた人間に對しその罪を赦されて且救はるといふことが能く分ります即ち神様の御獨子



イエスキリストは我々人間の賤しき性質を御取りなされて、その曲れる世に生れたまひ。人間に代りて苦を御受けなされたのみならず、色々々酷き試を御受けなされ、至く神様の掟に御従ひなされて、神様の法律の、なくてはならない道理を御あらはしなさいました。斯く人間の代りに、主イエスキリストが苦を御受けなされたうへ、人間が神様の聖なる法律を犯したるにより、永久き罰を受くべきことを御知らせになりました。然るに主イエスキリストはこの世へ下りなされしより七百年計り以前にイザヤといふ豫言者ありて、主は神様の法律を正しいと定め、人間の永久き罰を救ふことにつき、喜ぶことを豫言せられ、以て賽亞書四十五章二十一節二十二節に、汝等その道理を持ち來りて述よ。又共に計れど、この言を誰か古より示したりや、誰か昔しより告げたりしや。今の我エホバならずや、我の外に神あること奇し。我は義を行ひ、救を施

す神にして、我の外に神あることなし。地の果なる諸の人よ、汝等我を仰ぎ望め。さらば救はれん。我は神にして、我の外に神なければなりとあり。ます。人間は神様の完全なる御性質に向つて、實に罪を犯しましたるより、恵みある神様は、至くこの世をお救ひなされる爲に、ご工夫なされたることにて、そのご工夫は、即ち神様の愛と義との二つが結合して現れたものでござります。そこで又主イエスの贈を能考ふれば、即ち人間に向つて神様の過分ある愛を施されたる源であることが譯ります。抑神様は能はざる所なき此の世の造主でありまして、總て造られたるものと君主でありますから、神様に於ては、人間から受くる愛には、別段必用もありません。且又人間が神様に背くことを、少しも懼るゝやうなことはなく、又人間より稱賛を受くることを、神様に於て、望まらるゝこととは、ござりません。去れども、なくてはならない必用なる掟の破れたのは、其



まゝにしてその生み給へる獨子に肉体を受させてこの世へ降らしめ。その獨子は義ある掟を成就なし人間の爲に苦を受けて死かされました。希伯來書二章十六節にこの詞が書てあります。曰く實に天の使等を助けず。アブラハムの子孫を助く。この故に神に屬する事に就て矜恤と忠義ある祭司の長とありて民の罪を贖はんが爲に諸事に於て兄弟の如くなるは宜あり。そは彼自ら誘はれて艱難を受たれば誘はるる者を助得るありと。又聖保羅は羅馬書六章二十三節にこの詞を書ました。曰く罪の價は死なり神の賜は我儕の主イエスキリストに於て賜はる永生ありと。又全書十一章三十三節にあつて神の智と識の富は深きかな。其法度は測り難く。其踪跡は索ね難し。孰か主の心を知り孰か彼と共に議ることせしや。孰か先彼に施へて其報を受けんや。そは萬物は彼より出彼に倚り彼に歸ればなり。願くは世々榮神にわれアーンとありませ

す。そは主イエスキリストが此世の人間を救ひさるが爲に。お降らされしことは如何ある譯であるかと尋ねるに。前にも擧ぐる如く。全く神様の愛より出でたるのであります。假令は或人が裁判所に來まして罪人に面會して云へるやふ。此人は人間の巨細の約束を破りました。又私の感之の早い性質を辱めまして。又私の名譽を汚しました。その國の正しい法律とこの人の罪と和らぐ爲に。その咎を贖はねばなりません。然るに私の生きたる獨子は誠に清淨にして。一点のあじきこともなく穢れたることなく。逆も罪人など。比較的の物ではありません。けれどもこの罪を犯した罪人を大層憐恤して。その代りに自ら義なる正しい法律の制裁を永く引請ることを約束致し。またその人の代りにこの裁判所にて定められた刑罰をも引請る約束を致しませうと申し述べたやふものであります。聖保羅は主イエスキリストの優れた



る愛を考へて以弗所の書三章十七節み掲げて曰く。キリストをして信  
 仰ふ由て爾曹の心に居らしめ又曹爾をして愛に根ざし愛を基として  
 諸の聖徒と偕に測るべからざる。キリストの愛を知りうの淵さ長と深  
 さ高さを識らしめ又すべて神に満るものを爾曹に満しめ給はんこと  
 ありと又聖保羅が他の所に於て最も心の頑固ある罪人でありてもそ  
 の罪を悔改むれば主イエスキリストの救の力を受けることが出来る  
 と申されました。即羅馬書八章三十二節以下に己の子を惜まずして我  
 儕衆の爲に之を付せる者は豈彼に併て万物をも我儕に賜ざらんや神  
 の選たる者を認へんものは誰ぞや義とする神なる乎罪を定むる者は  
 誰ぞや死して復よみかへり神の右に在りて我儕の爲にとりなし給ふ  
 キリストなる乎と書てあります。故に今日の題としたる神は其獨子を  
 賜ふはとに世の人を愛したまへりといふ。その御言は即ちその獨子御

自身の口より出まして。その御言によりて我々は主に力と慰とを得る  
 のでございませす。さればキリストの贖を信じて神の前に義とせらるる  
 ものもみ救の道に入ることが出来るのでございませす  
 總て信仰のない人は獨りニコデモのまからず。この話しをききて大層  
 疑念を起すであります。が斯様なる人々の心に神の獨子がどうして  
 總ての人の罪を贖ふことが出来ませうか。又人は罪のためにどうして  
 永久罰を受けねばなりませんか。或は又キリストが神の獨子あるとい  
 ふ証據は何處にあるかなどといふ質問を起すであります。が併し左  
 様なることのみ思つて居る人たちは徒眼前この世の計畫をするのみ  
 に暇を費しなして終に滅されてしまひます。去るにても愛する兄弟姉  
 妹達よ些も横道を願はずして一筋に信仰の大道を進まれんことを勧め  
 申しませす。譬て申さば醫學を知らない人々が醫者の巧拙を知らうとす



るには他人が服用せし薬の効能をその病氣の結果に依りて決めねば  
 なりますまい。人々大抵は皆生理學や化學等を知りませんでも醫者に  
 治療せられてその薬を服用致します。若もその人々が一々醫者の薬の  
 分析が分らぬとて上手な醫者の薬を服用するを拒みましたから  
 之を評して誠に疑ひ深ひ大層馬鹿な人だと申すでありませう。總て學  
 術の説を調べますれば逆皆説き明すことは出来ませぬ。故に先臆説よ  
 り始めて漸く純粹に進まねばなりません。況して主イエスキリストの  
 贖のとは神様より與へられたるものにて不完全なる我々人間が之を  
 分析して悉く理解する事が出来ませんでも何の躊躇とがありませう  
 を。若しも金を借りたものが紙幣の珍しい模様が分らないといふので  
 其紙幣を出して借金を償ふとをしかかつたならば頗る間違つた話で  
 ございませう。然れども神自ら保証して人間の救主と定められたるキ

リストを信ずることが出来ずして永遠に滅亡に陥る人は一層愚かな  
 りてございませう。願くは今日申し演べました話を皆よく味つて主イ  
 エスキリストへ出なさい。提多三章四節より六節までに左の言が書  
 てございます。曰く然れど我儕の救主ある神の慈と人を愛し給ふ愛の  
 顯れし時かれ我儕が行ひし所の義き功に由す。唯その矜恤に循ひ重生  
 の洗と聖靈に由り新にする事とを以て我儕を救へりと實に私共人間  
 は何人でも神様の聖なる法律を破つて居ります故に永命の罰を受ね  
 ばなりません。それ故に人々が罪を悔改めずには神様に向つて一旦背き  
 し有様を猶續けて改めざる時は據奇く未來の後には不信仰の罰即永  
 命の苦を受けねばなりません。去りながら迷ひたる人々も主イエス  
 キリストの贖に依りて神様に親みするならば其信仰を義とせらる  
 る事が出来ませう。或人の話に只管に望の絶果たる安心の出来がたき人



々は殊に主イエスの救ひに依りて有難い意味を覺るとが出来ると申  
 されましが眞にその通りでございませぬ。又主イエスキリストの贖に  
 依りて天國へ行かれた人計りがその救ひに由りて救ひ上げられた樂  
 が能く分ります。夫故我儕人間の爲に殊更神様が其生給へる獨子をこ  
 の世へ下しなされ。その獨子が人間の代りに苦んで死なさいまし  
 たので。そは約翰傳三章十六節の終りに書てある言の意味を能く考へ  
 れば神様の愛と憐れみの爲に亡すといふ事が一緒に分ります。これは  
 未來の命を得れば限りなき最も優りたる樂しみとそその命を失へ  
 ば限りなき苦を受けねばあらいといふとが直に分るやうに書てあ  
 るのであります。さらば何に依つて然るやといふにその結果は唯信仰  
 すると信仰せざるとの二つに依ることでありませぬ。そしてこの言は限  
 りなき滅亡と限りなき救と二つの思ひを一言に並べてあるのであり

ましてこの言を分解すれば信する人のことと不信仰の人とに分れて  
 居ります。嗚呼愛する兄弟姉妹達よ我々人間がこの世に居ります間こ  
 の區別の如何を早くご自身にてご隨意にお擇びなさるとが必用でござ  
 ります。只々この世に居る間信する人々と信せざる人々とは何れも  
 この世の命のあとで救はれる人となる。救はれない人となる。二つ  
 に分るゝのみであります。そふいふ有様でありますから皆様はこの救  
 主をお信じなさいませぬか。但しは我儘な心を持ってこの罪を犯しこの有  
 難い救主を棄て永遠なき死の裁判を侈望みなさいませぬか。何れを擇んで  
 お取りになります

終りに望んで更に一言申し述べます。主イエスキリストを信せざる人  
 々は天の裁判所に於て永命の罰を受ねばなりませんから今にして  
 早くこの恵みなる救主の方へ逃れて出なさい。心を開いて聖靈の恵



みを受くるのが大切でございます。抑々神様は全能にましく、この世を瞬く間に滅すことも得たまふと雖も、滂惠によりて我々どもが生きながらへて居ることを得るのでございます。神様は人の良心を喚起し、聖霊を下して我々を御招きなさいます。又聖書によりて我々を救へ、牧師を遣はして我々を導きたまひ、獨子キリストは我々の前に救ひを垂れたまひ。我々を勵ましたまひて、主に歸することを得させたまひます。さるにても、主キリストは此世に於て實に人間唯一の慰主でございます。人もし神様を信せずば、此世に全く望みを失ふでございませう。望みなき人は世に不幸なものはございませぬ。今日擇ひました題は、よく人の知る所でございます。が實に福音の大切なるものでございませう。皆様はよく考へて、限りなき生命を、受けあさるゝやう、御願ひいたします。生命を得るか死に陥るか、二つの中の一つにあるのでございませう。

さいます。哥林多後書五章二十一節に是故に我儕召されてキリストの使者となれり。即ち神我儕に託なんぢらを勧めたまふが如し。我儕キリストに代りて爾曹が神に和がんことを爾曹に求ふ。神罪を識ざるものを我儕の代りに罪人となせり。是我儕をして彼に在りて神の義となることを得せしめん爲なりと記してございます。

神の愛終



## THE ORIGIN OF THE GOSPELS.

The ideas presented in this tract are almost exclusively derived from two sources, namely "Westcott's Introduction to the study of the Gospels," and a "General Introduction to the New Testament," which is contained in a commentary on St. Matthew's Gospel by Rev. Jno. A. Broadus, D.D. of the Baptist Divinity School, Louisville, Kentucky.

It is thought that the logical order would demand a consideration of the sources of authority for books declaring the divinity of our Lord, hence this second tract in the series. To those unacquainted with the works mentioned above, it may be well to state that the object is to show, both from external and internal evidence in the Gospels themselves, and from the history of events in connection with them, that the synoptic Gospels were written upon the basis of a common oral tradition which had become fixed by apostolic preaching, and that each author presented the events according to the bent of his natural disposition and under the circumstances in which he viewed them.



## 第二

### 福音書の起源

本冊に記載せる主意は専らウエストコットの「福音書研究入門」ドケン  
タツキ一のルイスピルなる浸禮教會神學校の神學博士ジョン、エー、ブ  
ルーメスの馬太傳註解中にある新約書入門に基きたるものなり。  
我等の主の神性を唱道する書冊の權威を調査するは論理の順なるべ  
しと思はる之が爲めに本冊出でたり。前記二大家の著書を閱讀せられ  
しことあき人に對して一言告げ置くべきことあり。そは右兩書の目的  
たる福音書の内部及び外部の證據に由り、又福音書と相關連せる出來  
事の歴史に由り、共觀福音書は口傳に基きて書さしものたるを示すに  
あり。而して此の口傳は使徒の創始する所にして、福音記者は何れも皆  
己が性質に應じ、將た又各自の見たる境遇に應じ、諸の出來事を記載し  
たるものあるを示すにあり。



## 福音書の起源

アンブラー述

能く考究へずには福音書を見るときは最初より今時の教會へ示された通りのもので有たらうと思ふでありませうが溯りて能く深くその沿革を調ぶるときは全くその然らざることが譯るでございませう私は今日この事について御話をいたしますのが最初イエスの弟子即ち使徒達は神の御心に従つて主イエスが御示しなされた御行ひや御話を實際見聞いたし其時代にはこれをその身に行ひその口に述べることを専一といたしましてこれを書物に記載することをば餘り大切なこととも思ひませんでたゞ神の力の偉大あることと精神變化の無限なることは神の子キリストがこの世に降りたまふによりて初めて知り得たるありと信じて居りましたが神の指導によりてこの信仰がこの



古き時代より今の世の人々の信仰の土臺となつたのでございませう。今其使徒達の事柄を能く考ふるに、その人々は全く口授せられたもの故、後來教會へ入る。信者達の爲に福音の歴史や神學の教を、書物又編纂する決心も出来ぬのでありました。今茲に使徒達の住地と其時代の習慣とを調ふるに、猶太人は元來書物に依て學ぶことを爲さずして、只學者達の口授と言傳とのみを信ぜ、又學校の教規に依ても、一切書物に書く事を致さぬといふ規則がありました。其後猶太人が諸國に散亂いたしました。がその時まで、此規則を固く守て居りました。且又主イエスの弟子達はガリラヤと云ふ國から出た人々故、いづれも土臺となるべき程の教育はありませぬ。加之猶太の田舎に住する人々も、大抵は文字を知らざるのみならず、文章上天然の働きは少もなく、且主イエスの弟子達は自己の働くべき責任だの、或は教を聞く人々の性質だのを考へて

矢張口で話すことが書物より利益であると考へたのでございませう。又弟子達は福音を説教することを命せられたもの故、如何に爲したらば、聽者の爲にさるべきかと徒に考へたのでありませう。羅馬書十四節又使徒の時代は儀文に仕ふるにあらす、御靈に仕ふるの時代であるといふとは、哥林多後書三章六節に載せてあります。斯の如き當時の有様故、使徒の一番大切なる目的は福音を演べ傳ふるのみならず、しが神の御靈に依り、聞く人の心の底に、其教の靈ある意味をよく浸込ませました。私共の今の福音書は、斯る次第にて往昔直ちに作られたものではありませぬ。夫より次第く、に順序を追て編纂せられたもので、最初は主イエス一代の事に就ても、大層廣いものなるが、夫を矢張弟子達は口で教へて居り、後に至り弟子達の知恵にて、人の靈魂を救ふに尤も必要なる教の分を撰び集めて書いたものでございませう。神の御靈ハ未來の教會



へ斯く必要なる教を弟子達の力に依りてお示し成されることが出来  
ました。が、弟子達が私共の今の福音書を書くには、大層手間取つたこ  
とでございませう。

借お弟子達は二十年の間働いて、主イエスが教へ置れし事柄を演傳へ、  
教會の信者も頗る増加し、孰れも其必要を感じました。故に弟子達は其  
間の経験を悉く輯めて福音の書を作られました。尤もお弟子達は其職  
務に就て必用なることに感じ、主イエスの御昇天の後、エルサレムに集  
て相談した其間に主イエスの一代の實録を支度する爲め聖靈の約束  
せられた御力を熱心に求めました。使徒行傳二十一章二十六節、  
よりお弟子達は猶怠らず猶太國の會堂や市場に立ちて宣教致しまし  
た。使徒行傳三章一節以下、四章八節以下、そこで弟子達は主イエスキ  
リヤトより口授せられた教えを毎日々々其儘話して居りました。が併

お弟子達が毎日の務の中最も大切なる業は祈ること、道を傳ふるこ  
とでありました。使徒行傳二十三章六節、四節終りに外の信者達は皆散亂  
せしが、使徒はエルサレムに止りて猶教會の進歩に注意して、その教理  
を教へ、又教義をよく守らしむることに従事して居りました。使徒行傳  
四章二十九節、三十一節、三十三節、四十二節以下、拾  
借又教會の歴史を能く調べますれば、紀元第一世紀の終末迄福音は全  
く文章に關係なく實物であつて、即ちお弟子達が主イエスに従つて教  
へられた儘の意味でありました。提摩太後書四章十一節、其時代の聖書は  
舊約全書に載てある豫言にして猶太人や異邦人の共に信奉したも  
のでございませう。使徒行傳三章二十一章、二章二十三節、  
第二世紀の始迄、主イエスの一代記は總て言傳へのみにして書いたも  
のとはあかつたでございませう。が、キリスト教會の隆盛するに従つ



て其有様を改正せられました。然れども二世紀までの人々は福音といふ言詞をも聞たとはなく唯舊約全書がキリスト教の傳道者の慰や智識の源でありました。アイリチヤスと云ふ有名な大昔の編集家の話に、二世紀に及んで教會の長老達は使徒の教を少しも違はぬ様能く順々に守つたと申しました。又アイリチヤスの話に二世紀までのキリスト教の教師は皆能く使徒の教を守りて主イエス一代の言行を能く知て居た故何れも勢を以て居たと申すことであります。譬ばパレカイといふ人は約翰の親友故其人の解釋は頗る大切な者となつたのと丁度同じことであります。

又使徒の第一の行ひを考ふるにこの人々は第一の證明人にてキリストの復活の証人なるのみならずヨハチのバプテスマよりキリストの昇天のときまでキリストと共にありて總ての事を實見せしゆへに何

事にもよく氣を付けて居りました。又イスカリオテのユダの跡續を撰ばれたとき聖ペテロは斯の様なる話をいたしました。即ち使徒行傳一章二十一節より二十三節までにこの故に主イエスの我等が中に往來したまひたる間即約翰のバプテスマよりはじめ我等を離れてあがられし日に至るまで毎に我等とともにありし中一人我等と共にその蘇生りしこと證明人となるべければありと記してございます。使徒は斯く蘇生の證明人故主イエスの教や行の證據をも明白に宣傳ねばならぬ地位でありました。使徒行傳四又その外に昔から只今に至るまでの書類は使徒達の宣傳へし仕方と前に書た説と能く符合して確であることが知れます。使徒行傳四章二十三節二十八章三十一節一聖ポロの公なる説教と聖ペテロの内密ある説教とを比較いたしました。その公の説教は主イエスの苦や再生のことに就て話され又内密の説教



は主イエスの一代記を細かに話されました使徒行傳二章二節以下四章八節以下十章三十七節より四十三節二十六章二十三節此等の事實は猶太人の集會の場所又は裁判の席に於て顯はされました今使徒の書を調べまするに書物に書てある教と説教した言詞と誠に能く符合して居ります故使徒は言行一致して主イエスの一代記を其教理の土臺となして説を立ましたとが能く知られまゝ加拉太三章一節に聖ポロがカラデヤ人に向つてソは愚ある哉既にイエスキリストの十字架に釘られしことを明かにその目の前にあらはされたるガラテヤ人よ誰か汝等をたぶらかしよと記されました又哥林多前書十五章一節より四節までにも聖ポロは何時もキリストの死ぬることと再生のこととに就て傳へしことが書てございます又帖撒羅尼迦の書を調べますと聖ポロは帖撒羅尼迦人に向つて主イエスの再生のことと世の

終りの日に再び降り玉ふことに就て話されました明かに書てあります此等のと共を考へ合せますれば初には使徒に教へられたる言傳は主イエスの職務の一切に就てのとあして夫より其一切のことが皆傳道者達の教の大本となつたのでございます  
 使徒は如何なる目的を以て書れしやといふに初めて道を求むる人の爲に書たものにあらずしてキリストの教の大本を能く聞きたる人々を導く趣意で書れたもの故聖ヤコブや聖ユダの書の外は皆残らず主イエスの一代記が書き載せてあります聖ヤコブや聖ユダの書には主イエスの職務の一切の書てございませぬ又聖ペテロの書には主イエスの苦みのことが細く書てあります矢張り聖ポロや聖ヨハネの書に書てある一代記と福音に書てあるとよく能く稱つて居り



ます。是等の證據を集めて見ますと使徒の一番大切なる目的は福音を何處迄も口授する積りであつたことが發輝と譯ります。加之使徒は其性質といひ、教育といひ、主イエスの命令に能く従ひ、自然と好き工合に傳ふるものが出來たのでございませぬ。且使徒の教の十分なる土臺は舊約全書でございませぬ。三摩太後書

又使徒の言傳へられたる福音は皆歴史にして、且我等の主イエスの證明人である。と明かにいひあらはされました。馬路加傳二十四章四十八節一節二十二節。又使徒の書を調べまするに、彼等は福音に書てある詳細ことを實際目撃いたしまして、その事實を布衍したものであるといふことが能く分ります。抑々使徒がその書を書くとき、その口にて話したる事を書物にするには、今の福音書に符合するやうに、歴史的證據を示さねばならぬと、殊更に勉めたものではございませぬ。が太古教會の書物

を記たる人々の筆は誠に能く符合いたして居りまして、馬路加の三福音を見ますれば、全く昔し使徒達の口にて話したる説教の再生であることが明でございませぬ。ツハ口で話したことが再び書物となつて世に出現したと歴史によつて申したのでございませぬ。

夫よりまた新約全書は如何にして集めしかといふことをも知らねばなりません。是は使徒即ヨハナが成就せしものだと申す人もございませぬ。若もそのやうに致したならば、キリスト教の信者達は他の福音の證據を捨て仕舞ひ、此の福音は方便のため、又はおそれの爲め、あどに集めたものだと申せう。然るに神様は大層知恵のある仕方を御擇びあさいまして、然してその時より今に至るまで、キリスト教の信者は新約全書の書き方を大層大切に思ひます。夫は神様のキリスト教の信者のうちより、最も知恵のある、慎み深き人々を撰びたまひて、之を聖書



として後世へ遺すために極めて大切なる極めて力ある真誠の書方を  
 定めたまひました今その工夫を能く考へるときは確に様々を勢權あ  
 る結果を見出すでございませぬ第一之を神の聖書となすにはその記  
 者の性行を知らねばなりません即真理のために能く働きたる人の記  
 録あらざればならぬ筈でございます一人の使徒の如きは既に真理を  
 離れて謬りに陥りました又第二には此の如く普く教會の判断により  
 て記者の性行を明にするによりその記録は新約全書の法規とするに  
 足るや否は問すして判然いたします儲その仕方に於ても大層手間ど  
 りましたが事柄に至つては最も確實に出来ましたコンスタンチンと  
 いふ王様の時代即第四世紀の頃別々に成て居りましたる書物を一緒  
 に集められたのが即新約全書でございます又第三にはこの最終の編  
 纂は十分完全に出来ました尤その以前は極めて不完全にて個々別々

のものでありましたが四世紀以前所々に散在せる各教會が自分々々  
 の知識によつてその書物を保存いたしたのでございます第四には四  
 世紀まで或る書物は他の書物より明な證據を有るものとせられまし  
 た夫は如何ある譯ぞといふに四世紀までは之を購讀する人々に便利  
 の爲又その外様々な事故の爲に或る書物が他の書物よりも廣く人々  
 に調べらるゝことが出来たのでございます併ながら一般普通の言傳  
 へによれば聖書の大部分は誠の研究家に信奉せられたものでござい  
 ます其他の事柄は格別な或地方又は或時代に限りて信奉せられたも  
 のと見へます尤四世紀には有名なる教育のある信仰心のある人々が  
 集りて其各種の書物を輯めて能く相談し校正を加えたる後確に證據  
 とせられた書方を世に出されました其集りの人々は皆知識ありて方  
 正なる評判の好い人にて宗派の私心も少しも持て居りませぬ故其



集りの肝要なる目的を十分仕遂るゝが出来ました。又ユシビヤスといふ有名な歴史家の話に、其時の人の書物の證據は、今日の證據より餘程澤山であつたと申されましたが、そふすると此の新約全書の書物を信する人々の議論は、斯ふでございませぬ。我等の今の新約全書は、キリスト教の信者は皆信じましたと。儲この四世紀の集りの人々は、其時澤山ある書物を集めて、新約の書物の證明を致しました。が、其書物の中、今日では澤山失つたものがありませぬ。夫故、今新約全書に反對する人々は、新約の書を眞誠のものでないと申しませうけれども、去ればと言て、其眞誠でないといふ確證は、矢張りございませぬ。

抑四世紀までは、キリスト教と無宗教との争ひが常に烈しくして、キリスト教の信者達は、信仰の爲に迫害を受け、散亂せられてから後、其危い

有様の爲皆一所に集りて相談する事が出来ませぬ。又四世紀まで、キリスト教の信者達は、キリスト教の書物の明ある書方に就て、誰も疑を容るゝ者はございませぬ。夫故に四世紀までは、キリスト教を信する人々の各其證明せる書物を用ゐて居りましたが、夫より所々から、その聖なる證明した書物を集めて、時の學問ある信心な人々が、その書物を確め證據立して、新約全書を編輯したのであります。儲又使徒の時より、四世紀までのキリスト教を會の言傳を調べば、此事の間違ないことが分ります。即第二世紀の終りから、四福音の格別なる威力が、キリスト教總体の教會にて、信せられ、又第一世紀の終りから、二世の初めに至るまで、用ゐたる書物は、今日欠乏して誠に半端あるものではありませぬ。二世紀の終りから、キリスト教の總ての教會は、何れの所でも、四福音を信奉いたしました。して見ると、この四福音は、使徒の暫時の間半端を證據



のみでありまして。夫より段々と明かき證據を引て、教會の命令でもなく。又各教會の運動でもなくして、自然に此等に関する争論も止み明かに確な證據が立ました故。その證據が即ち眞誠の土臺となつたでありませう。私が今比喩を以て話し致しませう。ある時山の上を歩行して居りました時、向ひの方から汽車が笛を鳴らし、白煙を吐きながら、サモ勇ましく走つて來たのを見ました。其時汽車の全体は見えまじなんだが、確に長い煙りは、風に引れつゝ跡に残して進行することを知りました。既に笛の聲を聞き、煙りを見れば、其下に汽車のあることを知ると同じく、使徒の時から暫の間キリスト教を信する人々は、様々の困難や、迫害を受け、自己の危いことや、苦いことに、頗る感じ、殊に其頃は半端な證據を出されても、根が十分なる證據のありませうもの故。最初から四世紀に至る迄の半端な證據も、其實は確な書方の證據を控へ、且其上に

使徒の証據立た事と能く突合まするから、其本當の證據をば飽まで信せねばなりません。又この四の福音は何年頃に起りしかと之を歴史に就て調ぶるに、二つに分れて居ります。即ち主イエス降世の後、百二十年から百七十年の間にありと云ふことと、百七十年から四百年の間に起りしといふことと、でございませう。エニヒヤスといふ有名なる歴史家は、三百三十八年に物故せられし人なるが、其人は大層學識のあつた人なるのを、あらず、研究力の強き人にて、コンスタンチン大王とは朋友でありました。この人は歴史を好む人でありませうから、一生の間澤山ある書物を集め、就中未吉失へる書物をも力を盡し、未來子孫のためにと探索しましたが、殊に新約全書に就ては、その集められたる書物より明か證據を見出さんと勉めました。が英國の有名なるライオット、監督さんの話に、エニヒヤスは



キリスト教の證據とあるべき書物を蒐める爲には、少しも力を勞さずいと申されました。夫は何故といふに、其證據の既に明であつたから、今其證據を集むるも無益であるといふことを知つて居つたからでありませう。夫故にエシピヤスも四福音や、使徒行傳や、聖ポロの十三の書の證據に就て、何事をも書ざりしが、夫はエシピヤスの考に其福音の書物の證據が既に明にして、人々が其書物に少しも疑ひを容れざるに依つてございませう。

又福音の一番初の言傳は、パピヤスといふ人から出ました。今エシピヤスの話に依るに、パピヤスは、ボレカプといふ有名な神學者の朋友であつて、ボレカプは又聖徒ヨハネの朋友だと申します。又アオリヤスといふ歴史家の話に、パピヤスは聖ヨハネの教へを聞た人にして、弟子であると云はれました。猶そのパピヤスの話に、なるに、聖マコは

聖ペテロより聞きてその福音を書いたものにて、その福音を書くに大層慎んで、誠の教の一切を書き載せて漏らさぬやうに勉め、且マコ福音の大本は皆そのときまで使徒達が口で演べ教へてあるといふことございませう。夫より又パピヤスの話に、馬太傳の最初の書方は、ヘブル語で書てありましたと、猶パピヤスの時代には、大層キリスト教信者の困難な時にして、パピヤス時代の書物は、大抵滅されて仕舞ましたけれども、其前の書物は、エシピヤスの書物から取りて書きました。又ヨエスチンマコターといふ人は、一世紀の終り頃生れた人でありましたが、其の人は信者に爲つた以前より、キリスト教の信者達と共に交つたでありませう。若さうならば、二十五才か三十才位の時から、キリスト教を能く聞た人でありませう。其人は哲學者の衣服を脱ぎ棄て、は仕舞ませんけれども、大層熱心に死ぬる時まで、キリスト教を賛成致した人でござい



ます。其人は外の人々から主イエスの此世に在りし間の公なる職務上の事を集めました。其人の書方に二つの好き證據が残つて居ります。その一つの書方は百四十七年頃のとが書てありましたが、其書方を能く調ぶれば私共の今の福音の最も大切なる即一体なる有様を見出すとが出来ます。又マヤスチン、マータの人はその一切の事柄を皆その時代の履歷書より取りました。其大略は矢張馬太馬可路加等から引てございます。その引用とヨハネ傳に書てあると、比較するに之も全く同一でございます。マヤスチン、マータの書を能く調べた人の話。その書物の中に主イエス、キリストの話をされたものの中唯この事柄が私共の今の福音の中に載てありません。其外の事柄は皆残らず書てあります。夫故にマヤスチン、マータの遺した證據を考ふるは主イエスの御話や御生活や其教に就ては最も明き證據で、又最も

立派な云傳へであります。且この歴史家あるマヤスチン、マータの話に依るに彼れが引用せる書物は毎日曜日毎日に都部を論せず、必ず會堂で朗讀せりと申します。其外マヤスチン、マータの引用せる福音の言傳は使徒ヨハネの死た後、三十七年程のもので履歷中本當の確たる證據を誤らぬ様にするが出来ました。畢竟するにマヤスチン、マータの親友の中には大勢其頃即一世紀の歴史を知るものがあつた故であります。且又マヤスチン、マータの話にも其履歷といふ書物は使徒達と一緒に交はる人々の力に依りて出来たと申しました。第二世紀にはクレメントといふ人が或る書物を編輯致しましたが、その書物を調ぶるにマコ傳、ルカ傳其他の福音に書てある教が明かに云顯はしてございます。最その中の大切なる書物はムラトニヤンといふものであります。これは證據の爲に大層大切な書物である。其ムラトニ



ヤンは、マコ傳から引た教でありまして、其中にルカが第三の福音を書いたことが記してあります。又聖ヨハネは、弟子等や長老の頼によりて、第四の福音を書いたといふことがあります。其時分には羅馬語で書きました。たゞ、其時代に残つて居る經典は確に百七十年頃の筆記であります。その經典の中には、私共の今の四福音の事も記載してあります。又同じ年代にスリヤの語で書た經典もありませんが、矢張同様四の福音のことが書てあります。

其他キリスト教に反對ある人々の書物も残つて居りませんが、その中にポーションリデーツといふ反對者があつて、この人は百十七年から百三十七年頃の人であります。矢張り四福音のあることは明に信じました。且その人の書物にも、馬太路加約翰の福音から引用したことは明であり、又バレンテナスといふ人は、百四十年に當りて、或キリスト教に

反對せる書物を編輯しました。が、矢張馬太路加約翰等の福音より明に引用してあります。マインアンといふ人は、百三十八年から百四十二年までに書きました。が大層亂れた説を以て居る人で、己れの奇説を應用せんとて路加傳と、ポールの十書を引用しました。然れども、百七十年から福音の證據が頗る明にありました。

マアチアンやアツセナガスや、テアピラスなどの人々が書たものは、短かい半端な書物なれども、其後アイリチヤスや、アレキサンドリヤのクレメントや、トルチニリアン及オリゲンなどの人々の書れたるものは、福音の十分完全なる明証が載せてあります。その人々が殊に四福音の事を書たのは、明に且確に、使徒達の書物と同玄となるのみならず、其人々の時から今日に至る迄、キリスト教信者は皆その四福音を熱心に信じられました。且その四福音に就て、アイリチヤスは、我々信者達の教



の知識はたゞ福音記者の助けによりて始めて我々に傳りたりと申しました。倍その福音は使徒達が最初口にて宣傳へ。それより神の御心に從つてその宣傳へた教を書物に編輯したもので。これを我々が信仰の土臺となりしものにして。馬太はその福音をヘブル語にて書きしが。其頃聖ポロや聖ペテロは羅馬に在りて。キリスト教の教會を作る土臺を目論見。又聖ペテロが羅馬より出しと。その弟子にして。譯官たりしマコは聖ペテロが宣傳せし教を書き記せり。これ即ちマコ傳あり。聖ポロの弟子路加は。聖ポロの傳へを筆記して。路加傳を作れり。その他は。主イエスの最愛なる一人の御弟子即ち主イエスの胸に依りてありし約翰が。エペソに居りし間に。約翰傳を書きぬ云々と申されました。倍アイリキヤスといふ人の話に。この時分キリスト教に背いた者も。

の四福音を皆信じたと申しました。又アレキサンドリヤのクレメントが紀元後二百年頃に書た書物があります。この人は四福音を自由自在に引用して。明に之を信じ。クレゲンといふ人も同じく之を信じ。其時代に流布した。他の福音と稱する書物は。皆捨て仕舞ました。このラレンといふ人は。百五十八年に生れた人であり。又トルチエリアンといふ人は。百六十年に書物を編輯しましたが。この人は福音に書てある教を尤熱心に信せしことが。其書物の上に能く現はれて居ります。故に此の四福音に就て書てある書物は。總てキリスト教の確か證據である。何故といへば。この四人の人々の生國に於て。キリスト教の信者の數が増加し。從つてその威勢も盛んになり。その教育や。經驗や。勢力も餘程強くなりたることを記しました。アイリキヤスは。百三十年頃小亞細亞に生れ。其後リアンスといふ所の監督とあり。行ひの大層正しき信心も人



ある故。従つて評判のよい人でございました。この人は小亞細亞、イタリヤ及びギリヤ、およびいふ國々のキリスト教々會の有様をよく知て居りました。アレキサンドリヤのクレメントは百六十年頃希臘の都府雅典に生れた人あるが、その後百九十年より二百三年までアレキサンドリヤの神學校長とあり、希臘、イタリヤ、スリヤ、パレスチンなどいふ國々を旅行せしむが、この學者は埃及、パレスチン、希臘等にて福音の證據を現はしました。トルチユリアンといふ人は百六十年頃阿非利加のカーセーといふ町にて大層力ある教師ありしが、此人は北阿非利加の基督教の證據を顯はしました。斯る次第あれば今の福音の正しいことは大昔出來た書物と後の書物と、かくて協はぬ持合の力に依つて出來たものでありませぬ。されば大昔に書いて書れたるその教を全く改削したならば、其最初の福音と私共今の福音と余程の違がある筈でありませう。然

るに我々の今の四福音の中にある證據を調べるに皆一つとして、最初の大本より出來て居らぬ書方は少しもありません。そふして最初は皆口傳より起りて遂に書物とありたるものであります。假令ば使徒行傳や使徒の書も初は口にて宣傳へられた福音の大本から出て、主イエスの終りの苦や再生に就て書てあるが、夫と同じ様に四福音を調ぶれば、主イエスの命の終りの事が一番肝要なことであつて、始の職務と終の事を比較すれば、その終のとは委しく細かく書てあります。又口傳の教と筆記の教とは大層能く似て居りますが、其福音即ちキリストの一代記を書たものは銘々の心に依つて書きたるに依り、其主意は皆違つて居ります。其證據を能く考ふれば、其暗誦した事は、其教の演説から取た物にて、アポストロ達はエルサレムに居りし間、主イエスのお話や行を度々演説して、終に極たことになりました。又福音の作り方を調ふれば



皆エルサレムの滅された時代即七十年若くはその以前に出来たものでありませう。何故といへば、エルサレムの滅亡から餘程後に書かれたものならば、確にそのときの酷いれろしい有様をその福音のうちには必ず書かれた筈でありませう。去るにても、聖書を能く調べた多數の學者達は、聯合して馬可傳は一番最初に出来た福音だと申します。此馬可傳を調ぶるに、其福音は大層明白に書てあります。主イエスキリストの生るゝ時の事が書てありません。蓋し聖馬可は使徒の時代に近き時書きましたから、其事柄に大層感し其事柄の一切をのて書きましたので、その福音を書た時分には、主イエスの生れた事實は左程必要でなきより、書き載せないものでありませう。馬可や路加は各其時代の福音を讀む人の種類によりて書れましたから、其福音の形状や性質は大體似て居るけれども、其作り方や又其中に書てある事柄の中聊違

ふ所があります。ソハ福音者の事情や、有様や利益に依て、ありませうけれども、それ逆矢張宣傳へられた教を長く用ゐて尊敬せられたから、皆同じく一致して書てあります。尤或福音に反對する人の話に福音中作り話が澤山書てあると申しましたけれども、他の或本を編輯した人の話しに、その頃作り話を捏造する様な違がないといはれました。使徒達が生きてた間は、其教を人々に宣傳ふることのみを生涯の務めとして居り、又使徒の没後、其教を福音に書いて極つた教となつた。故決して作り話しが其中に混入する筈はございませぬ。又約翰傳に就て斯いふ事が書てあります。ソハ三福音即馬太馬可路加等にはキリスト教の幼稚ある教會を要する福音が書てあれども、約翰傳はキリスト教々會の成立せられたるものゝ爲に書れしなりと、夫故約翰傳に就ては澤山な議論を起されて居りましたが、今日となりては



信心なる學者達が皆一致してその福音の作り方や他の一切を考  
 ぶるに約翰は確に主イエスの一人の愛する弟子にして主イエスよ  
 り其母マリヤの養を任せられた程にて主イエスと其母マリヤとは最  
 も親しき間柄の人であることを疑ひません  
 言傳に依るにこの約翰はエルサレムより餘程距りたるエマソンといふ  
 所に居りました時分年老いて其聖なる命の一切を法立致し其生活に  
 就て其生涯のことを考へられたといふとだにある程なれば彼の四  
 福音の如き我々の謙りて拜める主イエスキリストを四倍にして書け  
 る繪工を頼みその四倍の福音を読み且信仰を以て眞實に之を調る時  
 はその一切は歴史であると信せねばなりません即その福音に書てあ  
 る教は我々の命を能く改めしむるか改めしめざるかと主イエスに向  
 つて私共自身の心の内の有様を悉く依頼せねばありません即主

エスの話が約翰傳六章六十三節に出て居ります曰く命を與ふる物は  
 靈あり肉は益をなし我汝等にいひしことは靈なり命なりと



## THE DIVINITY OF JESUS CHRIST.

It could not be expected that in a tract devoted to a subject so all-embracing, more than the salient points of this great argument could be touched upon. It is to be regretted, too, that the Old Testament storehouse could not be drawn upon for materials, but the space is too limited to allow of this.

Two works have been compiled from most liberally for all that is contained in this third tract, namely Liddon's "Divinity of our Lord" and Row's "Jesus of the Evangelists," besides, which Gore's "Incarnation of the Son of God," has contributed large portions to the argument. As each of these books has been very carefully studied as a preparation for this tract, it is felt that the contents must commend itself to intelligent readers.



### 第三

#### 基督の神性

基督の神性は大問題なり。故に此の小冊子に對して過分の希望を屬するは不當あり。又舊約書を引用して其の材料となさんとしたるも紙數に限りありて果さず甚だ遺憾に思ふ所あり。

本冊の論ずる所は余が隨意を以て左の二書を編纂したるものなり。即ちリットンリットンの「基督の神性」リットンの福音記者のイエスは是れあり。此外ゴーアゴアの「神子化身論」を借り來りし所亦多し。此の諸書は本冊を著すに當り余の丁寧丁寧に研究したる所あれば謹んで有識の讀者に本冊を推薦せざるべからず。



イエスキリストの神性

アンブラー述

一世那勃翁は基督の神性なることを信じた人でございます。尤も普通の  
人々より區別する程の信仰者ではございませんが、人性については、  
綿密に觀察を下した人でございます。諸基督の証據については、別段申  
し述べるの必用もございませんが、聊彼の那翁が、キリストの御性行につ  
いて申したことをば、左に御話しいたじませう。即ち  
人の傳記を見るに、皆不完全不体裁のこと多き中に、キリストの御傳  
記は、實に完全にして、又無欠なものは、あらず。又人の反對を充分に  
打破りたること、キリストのごとき人は、あらず。種々の出來事、時勢、事  
情等に、感動せられ、時の風俗、人情などに、迷はさるることなく、堅忍不  
抜にして、總て外物の誘惑を、打破りたること、キリストのごとき人は、



これを他に求むるも得べからず始より終りまでその節を變せず常に嚴格質樸にしてその性行は無限の威嚴と柔和とを備へ終生の行為は多くの人の目撃せる所にして一の過失をも遺さずその品行は貴くして勢權と温和とに富み言行能く一致して自ら貴人の風を具へ高尚優美なること實に神徳といふより外あしかくのごとき高貴の人に向つて如何なる尊稱を與ふべきか我等は未だその名を撰ぶこと能はず

予は能く人性を知れり然れどもキリストは人生外の高徳者にしてキリストの事については何事もたゞ驚嘆の外なくその精神の如きその意旨の如き全く予を感動せしめ世上キリストのごとき性行を他に求むるも到底得べからずキリストは實に天地間獨特にしてその思想知覺風采及び教理は人間以外なり決して尋常のものあはあ

らずキリストの誕生及び在世の傳記其他教理を以て百難を排したること性行の純朴あることその容儀の福音及びその領地の年を逐ひて擴張すること等を考ふれば實に不可思議にして予は夢幻の中に圍まれたるの思ひを忖のみこの不可思議は予が全く拒絶することとも説明するとも能はず故に予は實際キリストを人間以外のものと思ふ若しも一つの透明鏡あつて能くキリストの眞体を寫すを得ば直ちに充分なる觀察を遂げんと思はるゝ程ありそれにてキリストと神とは一体のものであるといふこと明なりキリストを見れば神を知ることが出來キリストの言行を學んでは神の性行を理解することを得べしと思ふさればキリストは自ら余は余を遣はしたまへるものゝ御旨を爲すものなり是余が食物余が飲物なりとは宣へり



借イエスキリストの神性なることに就て聊お話しを致しませう。先此  
 に何某といふ人がある。と致しまして。其何某といふ人が。或外國の殊の  
 外混乱したる場合を付込み。其國へ趣き。私は某國の全權公使でござる  
 と申したならば。其人が全くの全權公使であるかないかの露はるゝ迄  
 は。其國の人々に對し能く欺きあふせることが出来ませう。併その國の  
 政府に於て。後に其人の信認狀を求めらる場合となり。是を調べて見ると  
 彼は如何なる者であるといふことが定かに譯りませう。先頃支那から  
 参りましたる媾和使の。デッドリング或は張邵等の如き。このたとへど  
 能く似て居りませう。此の人々は最初大層なる威勢をもつて來りまし  
 たれども。その政府よりの信認狀が不充分ある廉を以て。日本政府は彼  
 等と談判することを憚とせずして。奄ち逐ひ返したではございません  
 か。丁度夫と同じやうな譯で。主イエスが暫時の間私は神の子であると

申されましても。其證據を表はすことが出来ないならば。其以前正しい  
 と思ひました人々も皆主イエスは偽善者であると思ひませう。去あが  
 ら聖書にかいたことを能く信仰して見たならば。主イエスが眞誠の證  
 據をあらはされたのみならず。色々證據があります。其れに由りて基  
 督の眞誠あることが確められませう。夫故その信認狀即聖書を能く考  
 へて下さるやうに願ひます。  
 先第一に主イエスの教の本源は。どこから來ましたかと能く之を考へ  
 て見まするに。確に正しく神様からお受けあされた教であるといふこ  
 とがお分りになりませう。如何と云ればイエスキリストは名もなき寒  
 村の大工の家に生れたまひ三十歳まで御住居あされましたる御方で  
 ございました。乍併その教は天地の間に動きのない完全なる教でござ  
 いました。並々の教ではござりません。彼のナザレと申す村やガリラヤ



といへる地方の如きは、いづれも蒙げある田舎であります。斯く天國の基礎を示され  
 のやうなるところから出た人でありながら、斯く天國の基礎を示され  
 ました。(馬太傳三十四章三十一節)その天國といふ辭が馬太傳十三章三十二  
 節までお書てございます。其の思想をこの世の總てのところへ弘め  
 させるお積りでありました。又その天國の政事と申しますは、取りも直  
 さず人間の中に行はるゝ政事でございます。路加傳十七章二十一節の  
 中に、夫神の國は爾曹の衷に在とございます。此の天國の教の元祖  
 即イエスキリストの考は、當時の有名なる學者先生より學び得たとい  
 ふともなく、反つてその國の學者先生達の僻論には全く反對致されま  
 した。(約翰傳三十四章二節)この方はかく三十歳まで怪しい人と共  
 になれ交りにありまして、却つて名高い學者先生の教は頓と聞きません  
 で、只村の卑しい學校で少し計り學問をお習ひなさいました。元來此の

國の學校は皆別々、宗旨を奉じて居りまして、イエスキリストはその  
 宗旨の別々ある教師に従はれましても、其宗旨の學問をば少し  
 も御受けになりません。たゞ洗禮を御受けなされてから後は、おちろこ  
 ちらと巡回して、急しく天國の教を自らお弘めになり、又れ弟子達にも  
 弘めさせました。(馬太傳四章二十三節)  
 儲りの天國の教を能く調ふるに、主イエスの教は、いつも始から終まで  
 總て同じ主意でござります。(約翰傳十八章三十六節)馬太傳十三章三十二  
 節(二十四節)又主イエスのお話にも、ご自分の他、その天國の主長たるも  
 のは決してない。仰せられました。(馬太傳三十三章二十)又いつも天國の  
 教を弘める爲に、色々妨げのあることを豫言せられ、ました。けれど  
 ろれに對して、勝ねばならぬと仰せられました。(馬太傳三十六章十八節)二  
 十九章(三)又次に天國の教を弘めしむる爲に、十二人をお擇びになりま



したがその人々は誠に卑い身分にて學問のあい漁師をぞでありまし  
 て且その人々の中には餘程過失ある人もありました(路加傳二十二節)然  
 るにイエスはこの人々を遣はしになりました前に迫害だの苦みだ  
 の辱しめだの死刑だのといふ事を悉く豫言致されましたけれども此  
 の人々は主イエスのお話によりて天國の教をば世界中に必ず弘め傳  
 へねばならぬといふことを決心致しました(馬太傳二十八章十九節廿  
 九節馬太傳十四節約翰傳二十一章十八節二十九節馬太傳十傳十七節二十三  
 章林多前番四章九節)  
 借又主イエスが天國のくに就てお話をなされし時分と其時から今に至  
 る迄のキリスト教の歴史を擧て較べ見るに實に主イエスの神性であ  
 る證據が明に分ります故に只今此證據を少しお知らせ申しませせ抑  
 主イエスの死をされた後信者達の數が何程ありしやといふに

眞に僅計りの數でありまして其人々は皆エルサレムの奥殿の中に集  
 らるゝとが出来る位でありました(使徒行傳二)夫より段々と進でトル  
 チュリアンといふ人の時にありましては丁度紀元二百一年に當りま  
 すがこの頃斯の教は羅馬帝國の社會へ能く弘まりました更に獨乙國  
 の村落ある野蠻人の中にも傳播し夫より亞非利加の原野或は英國の  
 北の地方よまで及ぼしました夫から四五世紀頃の教會歴史を調ぶる  
 にいまだ教會の全く備つたる大きな集會はあかつたやうでございま  
 す夫のよからず羅馬帝國にはキリスト教に反對する人々もまたく  
 中々多くありましてその中あは知惠のある學問のある人々も居りま  
 した併それより降つて八世紀の教會歴史を調るとその時には歐羅巴  
 中の人々は皆ナザレのイエスが建て玉ひたる天國を熱心に信するや  
 うになりました又今日即ち十九世紀のキリスト教の有様を通觀する



に米國其他南洋洲の國々にても皆主イエスの政事に喜んで歸依するやうに成りました。加之阿弗利加などは宣教師が熱心に働かして。その中には様々な傳道會社をも設けてあります。又太平洋中の島々に於ても段々と主イエスの政事を信する様を傾かあります。又二年前支那の大騒動を能く考へてご覧なさい。その大騒動の原因といふは即ち我々キリスト教の道を妨ぐる目的であつたと聞きました。が遂にその目的を達することが出来ずして終りました。又今度の日清戦争でも却て益々キリスト教を廣むる良き方便とあることと思はれます。又印度國の今日の有様を能くお調べあすつて御覧なさい。彼國の學問ある人々で聖書を信仰し能く調べて居るものが澤山あります。且印度の土耳其だの朝鮮だのぬふ國々にはキリスト教の教師や傳道者達が矢張り非常な熱心にて困難を忍んで働いて居ります。それのみならず西洋

諸國から解纜する蒸氣船は大概心を神に捧げた教師達を澤山乗せて来ります。その教師達の中には餘程教育のあるものがあります。左様いふ有様であります。から次第に世界各國は我等の主及び主キリストのものともつてまいります。ことは實に明なことでございませぬ。既に東洋のとき古より廣く行はるるキリスト教反對の宗教がございませぬ。けれども夫等は次第々々に消亡して矢張りキリストの天國が廣まるではございませぬか。日本にても佛教とかたゞしは偶像教とかいふやうなものもございませぬ。が主イエスの力によりて其勢は段々と衰へてしまひませう。併し今日の日本の有様を能く考察して見ます。に若しも日本國の重なる正しい人々がキリスト教を受けざる時は終には宗教のない哀しい有様に陥ること。心配お存じます。その證據は大昔羅馬帝國の有様と日本の今日の有様と丁度同々やうでございまして。キリス



ト教の這入様も亦同じやうでございませぬ。羅馬では始めキリスト教が這入ました時より他の宗教は全く無くありて仕舞ました。又キリスト教と他の宗教と、宗教上の歴史を比較するに、全く雲泥の違ひがあります。たとへば佛教は色々立派な事柄を云傳へ其信者も澤山あります。けれども東洋の國々にこそ行はるれ。西洋には決して弘まらません。キリスト教は世界中如何なる處にも及びます。又回々教は色々勢力があり、又神は只一人なるを承知して居ました。それども其説所は人々の慾望を導くを目的とする教でござります。そしてその教義を弘めるには、争闘をせねばならぬやうな有様であります。されば亞刺比亞人はその教を早くより受けまして、其教の爲に戦をつとめ、熱心に争闘を致しました。夫故その近邦へは能く弘まりました。けれどもその近邦の疆土より遠くへ及びることが出来ません。孔子様は建國以來一番

立派な正しい教を大成して、支那全國の人々を教へまじたけれども、孔子の教が佛教の勢力を治むること能はず。却て佛教は孔子の教の盛なる地へ闖入して、遂にその教を弘めました。次に主イエスの生れ給へることが馬太傳一章十八節より二十二節まで、に書てあつて、不思議なことのやうであります。けれどもその不思議なこと、主イエスの奇蹟をくらべて見ますれば、何れも能く符合すること、でございませぬ。抑聖書に書てある不思議なことがらを能く考へて見たならば、それに就ての證據が丁度二つあつて、確に能く分ります。その證據の一つといふは、若し福音書にかいてある奇蹟を九です。てふしました。あらば、即ち又福音書にかいてあるキリストをも共に亡くしてはならぬやうにあつてしまひます。又その二つには、主イエスのよみがへりのこと、でございませぬ。この事に就て總ての正しい



教會に於ては何れもそのよみがへりを確信致します。この奇蹟は尤も不思議を尤も驚くべき奇蹟であります。夫故に苟にも再生を信する人々は、尤も明か一番の證據であります。その他の奇蹟の中でも、此事が尤も明か一番の證據であります。夫故に苟にも再生を信する人々は、その他の奇蹟をも矢張り悉く信せねばなりません。約翰傳十章三十六節より三十九節までに、主イエスキリストが斯いふことを仰せられました。即ちわれは父の聖別ちて世に遣し、神の子なりと稱ばとて、何を之を褻瀆することを爲すと曰べけん乎。もし我わが父の事を行すば、我を信すること勿れ。若これを行ば、我を信せずとも、其事を信せよ。蓋父の我にあり、我の父に在ることを爾曹しりて信せんが爲なり。とこの詞の意味を能く考へて見ますると、主イエスのお心持で、その奇蹟が御自分の明なる證據であるといふこととござります。且又主イエスは神性を保ち、保ちされて、此世へお出にありましたから、自然にその奇蹟が發し、

たのでござります。且この不思議なる奇蹟を能く調べて見ますれば、至慈至善の御性行と能く符合いたして居りませ。且又主イエスは、其奇蹟を、ご自分でも頗る氣を付けて、お擇びになりました。ソレテ我々が、その奇蹟の苦みを贖て下さるふ力をお表しにありました。ソレテ我々が、その奇蹟の苦みを能く考へますれば、何も色々な教や靈魂の慰を受けることが出来るやうになつております。ある書物を編輯した人の話に、キリスト教の信者達が稱するキリストと、或註解者の稱するキリストと、その意味が若も稱はざるやうであつたらば、その註解者は即福音に書れたる一代記を信じないので、全く心の正しい人達が能く心を静めて福音にかいてあるキリストの神性ある證據を順々に披ひて讀下したならば、其奇蹟は即眞誠ある證據になります。云々と申されました。抑主イエスキリストの奇蹟を以て、その他の像言者や使徒等の奇蹟をくらぶるに、主



イエスのみは全く他の力を借らずして御自分の御力を以て其ふしぎをお現しになりましたので、外の聖書にかいた奇蹟とくらべて見ればその差別は恰も歴史と小説との違ひ程でございます。或人の話に不思議あるキリストは矢張り普通のキリストにて敢て異なることあり。其證據は我々が信するキリストと天道とを考へねばならぬと申しました。が實に天道をよく考へたならば不測の力をも見出すことが出来る筈でございませぬ。その働きはいつも變ることあり規則によつて働きます。ゆへその規則を能く考へたならば人の心をも表に抔くことが出来るに違ひはありませぬ。併ながら無神論者は不可思議論者の話によつてキリストのあるといふことをその天道以外の話にして置きますから。どうしても別に一種分らないものゝやうになる。併左やうなる人は心の規則もあることあり。又良心もありません。徒に規則のみを考へる

の罪でございませぬ。その天道に依つて現はされたる規則だの人間の良心に正しい望をを保つことだのといふやふなもの皆造主のあるといふ證據としてよく知られます。何故といふに天道は進歩だの開發だの目的だのといふ様々のことをあらはされます。依ていざいませぬ。そして主イエスキリストは實にこの天道の大基本であります。約翰傳一章三節四節五節にこの語が書てあります。曰く萬物これに由て造らる。造れたる者一として之に由らで造れしは無之に生あり。此生は人の光あり。光は暗に照り。暗は之を曉らざり。又哥羅西書一章十四節より十八節までを玩味するに矢張り我々人間の考ふる如くこの世界は神の世界であつて機械的の法律でなく人の満足すべき神の啓示が必用である。と記してございませぬ。さるにても吾人どもにこの分らない天道の中に明き證據があるといふとを見出すことが必要でございませぬ。若も



キリストが此世へお降りならざりしならば。この世界百般のとは皆道理のちい。暗黒おもものでありませう。けれどもキリストを信する人々には能く神様の至善至誠なることや完全なる御性質をを知ることが出来る。来ます(四約翰傳一章十八節二十四章九節三十二節十章四節六節八節九節十節十三節)されど未だ神を見た人はありません。徒神の生給へる獨子即ち父のふところにいる者のまことの道理をあらはされました(十四約翰傳一章十九節)又人間に道德のある有様を考へて見てもキリストを信する人がいへる罪と云ふと。即ち人間が真正の性質を背き神の法則を破れることに就てもその見やうが眞實眞正であるといふことが信せられませう。さてそのキリストを信する人の考では罪を犯せし人々は天道の大切ある本當の規則を破りたるものです。その罪人達の有様を能く考へて見ると猶更贖主の有難い必用を感ずることが強くなりませう。

す。かく人間一般に罪を得たる有様が分りませると自然とその贖の望みをば。主イエスキリストに掛てくるやうになりませう。これ畢竟するに主イエスが人間の罪の贖主であるといふことがお分りになるに依て。ごさいませう。(約翰傳一章二十九節馬太傳二十六節二十八節)去るが故に天國の政事を弘むるの規則はとりもなをさず。銘々の心にその贖の望を起すことが出来るの規則であります。ある書物を編輯した人は骨を折て福音にかゝれたるイエスは本當の人であつたと證據立をなし。然して神性と人性とを連合せられたものだと申しましたが。あるやと基督の御傳記を造り話といはしても其を捏造するやうな馬鹿々々しいとは出来ません。抑も基督の傳は其頃の無學な人々が敢て相談をも致しませんで。其時分の云傳へを集めて書きましたもので大層明かか一代記です。その一代記を能く調ぶるに。その各の書た福音は銘々の見所が別々



でありますけれども、之を熟讀玩味するとその主意は一つに貫徹して居りました。何も變つたとはござりません。ソコ人々は神と人間と連合して確と密着して居るやうにあらはさふと致しましたけれども、これが造話あれば到底出来ぬとながら其人々はその時代の説に従ひました。故誤りが少なふとございます。たとへば猶太人の中には、神と人間と近づいて居る人は豫言者であると申しましたが、その豫言者は何時も豫言する時にあたつて徒神様から受けたることを豫言した丈でございませぬ。それに反して主イエスの話は自得のものを以て御自分の心に覺りなされました。(傳約五章三十一節 馬太)故神と御自分との間の差別を分たすに、丁度神のやうにお話ささいました。假令は舊約時代の豫言者は豫言することを主イエスに告げんと仰せられました。個様に主イエスの

御心は明白でありましたから、何時でも疑ふことなく間違のあいことを。話をしあさいました。一寸考へても知れたこととでございます。が總ての人の著したる造り話しの書物を御覽なさい。主イエスの如き完全なる知識を造り話しに造られやうとは、夢想にも思はれません。故にその造り話のやうなものは主イエスに於て少しもありません。或る宗教の妄信者の如き時として、我は神の御托宣を受けて現れたと申しました。又我は神の御身代り。或は御使ひに出で來れるものであるのも、または神通力を有する人であるなど、申しませぬ。けれども、側より其知恵を試験した時には、確か見認をあらはすとが出来せん。夫に反して、主イエスの時代の一番學識ある學者は、主イエスと共に議論致しました。とき全く閉口致しました。(馬太傳二十二章四十六節 馬可傳四章十節)又主イエスの時代に猶太人一般舊約全書は間違も無い誠に完全ある



ものと思つておりましたけれども、主イエスばかりはその書方を見恭しい詞を以て御賛成なされ時々我爾曹に告げんどの御言葉を以てその中の幾分かを説明し給ひしと同時に又之を廢たまひしともありませ(馬太傳五章十八節馬可傳十章五)ソコで主イエスの説教を聞きたる人の話に主イエスの御話は其時分の學者の話より大層力のある話であつたと申します(馬太傳六章二十五節より三十三)この時代の一番心清かりし人々の話にも我々が説く所のこの教は元より誠なれども、イエスキリストは獨り我等よりすぐれたる無上の榮光と威勢があると申しました(馬太傳七章)偕又外の宗教の元祖の有様を能く考ふると時々精神が呆然とするやうな有様でございます。主イエスに就ては尤も驚くべき神聖なる御話や不思議な御事をなさいまして、常に落付て居られました。又主イエスが教をお説きなさるゝ時はいつも極め

て通例なることを擇で譬を以て話しなされたので、その教は總ての人々に感ぜさせたのが極めて多ふございました。馬太傳六章二十九節又キリストは敵と反對しても猶更不思議な事をなさいました。馬太傳二十五節一節馬可傳十四章六十四節路加傳五章二十又主イエスは何時でも御自分の信するを説教おされましたけれども、矢張り我は心の柔和なる謙るものであると仰せられて人にも柔和なることと謙るごとの大切なる譯を教へ玉ひました。馬太傳二十九節一且又その一代記を調ぶるに御自分で説教なさるゝことと其謙る有様とを能く明かに見ることが出来ませ(約四章七節八章十二節十四節十六節十五章二十六節六章三十五節五十一節十二節三章二十二節二章八章四十九節二十一章五十五節二十三節十四節六章十五節馬可傳十三節三十一節馬太傳二十一章五十三節九十一節)是等の引証を能く調ふれば主イエスの謙遜を主とせられたることが能く分りませう(路加傳十四章



十節より十八節まで馬太傳三章十八節(四) 借福音にあるキリストの性質を考ふるに慈悲と聖あるとが相和して居ります。仰この世の人の罪深き有様を能く考へたならば主イエスの如き性質を持つとは我々人間には甚出來難ふございます。如何にと申すに世にいふ慈悲深い人は世間の人々を哀れんで居りますから世間の人も亦この人に過ちありても容易に之を許しませう。夫に反して正しい心を持つ人は何時でも他人の過をば餘りに厳しく攻め過ぎます。然るに聖書を調ふれば主イエスは慈悲深くして罪人の望のないものを哀れみその人々を救はん爲めに之と交際することを求められ聖徳ありて全能の力を現はし玉ひまじた。是は聖書に記してある通り猶太人や異邦人は悟ることが出來ない程でございました。(馬太傳九章十節十一節十二節十三節十四節十五節十六節十七節十八節十九節二十節二十一節二十二節二十三節二十四節二十五節二十六節二十七節二十八節二十九節三十節三十一節三十二節三十三節三十四節三十五節三十六節三十七節三十八節三十九節四十節四十一節四十二節四十三節四十四節四十五節四十六節四十七節四十八節四十九節五十節五十一節五十二節五十三節五十四節五十五節五十六節五十七節五十八節五十九節六十節六十一節六十二節六十三節六十四節六十五節六十六節六十七節六十八節六十九節七十節七十一節七十二節七十三節七十四節七十五節七十六節七十七節七十八節七十九節八十節八十一節八十二節八十三節八十四節八十五節八十六節八十七節八十八節八十九節九十節九十一節九十二節九十三節九十四節九十五節九十六節九十七節九十八節九十九節) 去ちがら神の不思議ある御力や正しい

道ふ少しも踏違す。お従ひなさいました。又世間にありとあらゆる人々の罪惡を全く亡すことをなさいませんで力を劃りに唯信仰ある人々の病も癒え直しなすつて下さいました。(馬太傳八章十節十一節十二節十三節十四節十五節十六節十七節十八節十九節二十節二十一節二十二節二十三節二十四節二十五節二十六節二十七節二十八節二十九節三十節三十一節三十二節三十三節三十四節三十五節三十六節三十七節三十八節三十九節四十節四十一節四十二節四十三節四十四節四十五節四十六節四十七節四十八節四十九節五十節五十一節五十二節五十三節五十四節五十五節五十六節五十七節五十八節五十九節六十節六十一節六十二節六十三節六十四節六十五節六十六節六十七節六十八節六十九節七十節七十一節七十二節七十三節七十四節七十五節七十六節七十七節七十八節七十九節八十節八十一節八十二節八十三節八十四節八十五節八十六節八十七節八十八節八十九節九十節九十一節九十二節九十三節九十四節九十五節九十六節九十七節九十八節九十九節) 且又この憐みある慈悲深い主イエスは當時儀文の宗教及偽善者に對して何時も熱心に反對致されました。(馬太傳六章二十三節二十四節二十五節二十六節二十七節二十八節二十九節三十節三十一節三十二節三十三節三十四節三十五節三十六節三十七節三十八節三十九節四十節四十一節四十二節四十三節四十四節四十五節四十六節四十七節四十八節四十九節五十節五十一節五十二節五十三節五十四節五十五節五十六節五十七節五十八節五十九節六十節六十一節六十二節六十三節六十四節六十五節六十六節六十七節六十八節六十九節七十節七十一節七十二節七十三節七十四節七十五節七十六節七十七節七十八節七十九節八十節八十一節八十二節八十三節八十四節八十五節八十六節八十七節八十八節八十九節九十節九十一節九十二節九十三節九十四節九十五節九十六節九十七節九十八節九十九節) 又福音にかいてある所の苦を受る時に主イエスは實際にその驗をお顯はしになりました。即ち其終の苦の如き神性の力と肉體の死ぬることを一緒にあはらしにやつたものでございます。(約翰傳九章十三節十四節十五節十六節十七節十八節十九節二十節二十一節二十二節二十三節二十四節二十五節二十六節二十七節二十八節二十九節三十節三十一節三十二節三十三節三十四節三十五節三十六節三十七節三十八節三十九節四十節四十一節四十二節四十三節四十四節四十五節四十六節四十七節四十八節四十九節五十節五十一節五十二節五十三節五十四節五十五節五十六節五十七節五十八節五十九節六十節六十一節六十二節六十三節六十四節六十五節六十六節六十七節六十八節六十九節七十節七十一節七十二節七十三節七十四節七十五節七十六節七十七節七十八節七十九節八十節八十一節八十二節八十三節八十四節八十五節八十六節八十七節八十八節八十九節九十節九十一節九十二節九十三節九十四節九十五節九十六節九十七節九十八節九十九節) 又或人の説に神と共にお話しをなされし時御自分と神との間の關係に就てお話をなされたといふとです。約翰傳十章三十三節に猶



太人對へて曰けるは石にて撃んとするは善事の爲に非ず爾たと發憤  
 ことをいひ且なん老人なるに己を神となすに因てありと書てありま  
 すが主イエスが若本當の神でないならば實に何時でもその咎めを能  
 く説明す筈でございませうに夫に反して一番危い時に眞誠の教を施  
 し玉ひ只其正しき行ひを以て神性を現はし玉ひ何時でも人に對して  
 信仰をお勤なさいました(馬太傳四章十九節五節九章二十六節九  
章十九節路加傳四章二十六節四章四十九節三章三十二節馬可傳二  
五十三節六章五十二節九章三十三節五十四節五十五節五十六節五十七節  
五十八節五十九節六十節六十一節六十二節六十三節六十四節六十五節  
六十六節六十七節六十八節六十九節七十節七十一節七十二節七十三節  
七十四節七十五節七十六節七十七節七十八節七十九節八十節八十一節  
八十二節八十三節八十四節八十五節八十六節八十七節八十八節八十九節  
九十節九十一節九十二節九十三節九十四節九十五節九十六節九十七節  
九十八節九十九節一百節)有名なる書物を編輯たギゾーと  
 云ふ人の考に主イエスが我は神なりと仰られた時或人々は其言を信  
 せずして謔をね話しなさいましたと云ひ又或人々は誠をね話しな  
 さいましたといひましたたがこれはその自分の性行と信仰とによるもの

だ。と申されました。この世には不可思議な事が深山わつて罪深き暗黒  
 ある世界でありますから。謔を話して人間を欺したとしても。亦或は自  
 ら欺したとしても。それは鬼もあれ。神は肉体を受けて。人間を救ふために。  
 この世へ降降りあされ。聖なる身。に人の罪惡をば。引受けあされた  
 ことは。誠に分りやすく。有難いこととございませう。夫故に主イエスの弟  
 子達の書物の意味を能く味つて見たならば。自分の過や。無識な有様を  
 少しも隠さずに書きあらはした事が分ります。馬太傳十五章十六節十  
 六章十八節十九章十四節二十章二十節二十一節二十二節二十三節二十四節  
 二十五節二十六節二十七節二十八節二十九節三十節三十一節三十二節三十三節  
 三十四節三十五章三十六章三十七章三十八章三十九章四十節四十一節四十二節  
 四十三節四十四章四十五章四十六章四十七章四十八章四十九章五十節五十一節  
 五十二節五十三章五十四章五十五章五十六章五十七章五十八章五十九節六十節  
 六十一節六十二章六十三章六十四章六十五章六十六章六十七章六十八章六十九節  
 七十節七十一節七十二節七十三節七十四節七十五章七十六章七十七章七十八節  
 七十九節八十節八十一節八十二章八十三章八十四章八十五章八十六章八十七章  
 八十八章八十九章九十節九十一節九十二節九十三節九十四章九十五章九十六章  
 九十七章九十八章九十九節一百節。以下路加傳四章八節九章  
 四十六節四十七章四十八節四十九節五十節五十一節五十二節五十三節五十四節  
 五十五章五十六章五十七章五十八章五十九節六十節六十一節六十二節六十三節  
 六十四章六十五章六十六章六十七章六十八章六十九章七十節七十一節七十二節  
 七十三節七十四章七十五章七十六章七十七章七十八章七十九節八十節八十一節  
 八十二章八十三章八十四章八十五章八十六章八十七章八十八章八十九章九十節  
 九十一節九十二節九十三節九十四節九十五章九十六章九十七章九十八章九十九節  
 一百節。以下馬可傳十章九節十章十一節十二節十三節十四節十五節十六節十七節  
 十八節十九節二十節二十一節二十二節二十三節二十四節二十五節二十六節二十七節  
 二十八節二十九節三十節三十一節三十二節三十三節三十四章三十五章三十六章  
 三十七章三十八章三十九章四十節四十一節四十二節四十三章四十四章四十五章  
 四十六章四十七章四十八章四十九章五十節五十一節五十二節五十三節五十四節  
 五十五章五十六章五十七章五十八章五十九節六十節六十一節六十二節六十三節  
 六十四章六十五章六十六章六十七章六十八章六十九章七十節七十一節七十二節  
 七十三節七十四章七十五章七十六章七十七章七十八章七十九節八十節八十一節  
 八十二章八十三章八十四章八十五章八十六章八十七章八十八章八十九章九十節  
 九十一節九十二節九十三節九十四節九十五章九十六章九十七章九十八章九十九節  
 一百節。以下路加傳九章一節二節三節四節五節六節七節八節九節十節十一節十二節  
 十三節十四節十五節十六節十七節十八節十九節二十節二十一節二十二節二十三節  
 二十四節二十五節二十六節二十七節二十八節二十九節三十節三十一節三十二節  
 三十三節三十四章三十五章三十六章三十七章三十八章三十九章四十節四十一節  
 四十二節四十三章四十四章四十五章四十六章四十七章四十八章四十九章五十節  
 五十一節五十二節五十三節五十四節五十五章五十六章五十七章五十八章五十九節  
 六十節六十一節六十二節六十三節六十四章六十五章六十六章六十七章六十八章  
 六十九章七十節七十一節七十二節七十三節七十四章七十五章七十六章七十七章  
 七十八章七十九節八十節八十一節八十二章八十三章八十四章八十五章八十六章  
 八十七章八十八章八十九章九十節九十一節九十二節九十三節九十四節九十五章  
 九十六章九十七章九十八章九十九節一百節。以下馬可傳九章一節二節三節四節  
 五節六節七節八節九節十節十一節十二節十三節十四節十五節十六節十七節十八節  
 十九節二十節二十一節二十二節二十三節二十四節二十五節二十六節二十七節二十八節  
 二十九節三十節三十一節三十二節三十三節三十四章三十五章三十六章三十七章  
 三十八章三十九章四十節四十一節四十二節四十三章四十四章四十五章四十六章  
 四十七章四十八章四十九章五十節五十一節五十二節五十三節五十四節五十五章  
 五十六章五十七章五十八章五十九節六十節六十一節六十二節六十三節六十四章  
 六十五章六十六章六十七章六十八章六十九章七十節七十一節七十二節七十三節  
 七十四章七十五章七十六章七十七章七十八章七十九節八十節八十一節八十二節  
 八十三節八十四章八十五章八十六章八十七章八十八章八十九章九十節九十一節  
 九十二節九十三節九十四節九十五章九十六章九十七章九十八章九十九節一百節。



達の心の中の誠に正しいことが判然致します。ソユデそのれ弟子達が主イエスの一代記を書いたのです。其人々が主イエスの人性の身体が弱かつたる有様ななども明に書きあらはしてあります。(約翰傳四章七節、路加傳四章九節、七章二十八節、三十四節、馬太傳四章二節、八章二十二節、二十四節、約翰傳十節、併ちがら主イエスの悪しき行だのわるい話だの罪のある有様なのだといふとは、毛程も見ゆません。且又主イエスは御自分が罪を犯したお話をさされたとはありませぬ。約翰傳十八章三十七節に我は王あり我これが爲に生れ。これが爲に世に臨れり。蓋真理について證を爲んためあり。すべて真理に属者は我聲を聴とあります。約翰傳は主キリストの神性に就て多くの直接なる證據を與へました故に。之に對する反對論も甚だ多く。此福音の眞理と威嚴とに付て攻撃を蒙りましたる七十年頃。反對の一派起つて約翰の福音を攻撃せしが十七世紀まで福音の眞理は消へませ

ん。十七世紀に於て又々反對を生じました。福音の眞理は益々顯はれました。或人のいへるに約翰傳を書いた人は主イエスの弟子ではないと申しました。けれども二世紀には一般のキリスト教の教會にてこの四の福音を堅く信じました。且又眞理を捨ることを好まざる人々はこの約翰は主イエスの愛する弟子にて馬太馬可路加杯にくらぶれば約翰の見様は右三人の見様と少しく違つたのであります。又約翰は別の時に其傳を書きました。又エタだのヤコブだのペテロだの。ポーロだのは皆同様にその書物に主イエスの神性なることを書て。明に後世へ教へました。又使徒の時に書物を編た有力なる正直の人々は皆主イエスの神性なることを明かに信じて。主イエスを拜みました。尤も主イエスは夫に依て眞誠を教ふるが爲に十字架につけられました。が之はキリストを神の獨子と信すること拒むたる人々の業であります。(路加傳七章十節)



七十一節より六十五節まで)一世紀から三世紀までに書た讚美や祈りの  
 言葉は主イエスの神性を尤も善く教へます。且聖公會の聖餐式に書た  
 二の唱は二世紀の頃より出來ました。即ちその一は「聖なるかき聖なる  
 哉。聖あるかな。サハヨフの神なる主。主の榮光天地に充り。最も高き主よ。  
 主に榮光あらんことを願ふ。云々。その二は「最高きところには神に榮光  
 地には平安。人には恩恵あらんことを願ふ。主ある神。天の王能はざるど  
 ころなき父ある神よ。我等主を譽。主を讚へ。主を拜み。主に榮光を歸し。主  
 の大なる榮光のために。主に謝し奉る。獨り生れたまひし聖子イエスキ  
 リストある主よ。世の罪を除きたまふ神の羔父の子。主なる神よ。我らを  
 憐れたまへ。世の罪を除きたまふ主よ。我らを憐れたまへ。世の罪を除き  
 たまふ主よ。我らの祈りを受たまへ。父なる神の右に坐したまふ主よ。我  
 らを憐れたまへ。キリストのみ聖あり。キリストのま主なり。キリストの

み聖靈どうもに父の榮光の中において最も高し云々とございます。  
 この神性ある證據の他舊約全書に載せて豫言せられたることや。その  
 他の證據も随分澤山ございます。即ち歴史にあるキリストは取りも直  
 さず教會を治むるキリストと同じこととございます。キリストは至善  
 至正なる聖人として尊敬する人もありませんが。これもキリストの神性  
 を証明したものと思はなければなりません。又或人はキリストは人に  
 正道を教へたるのみならず。その感動を人の心中に注入したと申され  
 ました。故にキリストの教は他の聖人賢人に比ぶれば。一層高尚あるに  
 相違ございませぬ。キリストは世に降りたまひてもつとも活潑なる。最  
 も仁慈ある行をもつて救の道を開きたまひ。キリストの神性を信する  
 ものには神の御心に協ふところの總ての恵をあたへたまふべしと約  
 束したまひました。



この証據を信すれば我々の身体や靈魂をこの世の救主へ献げねばなりません。且又主イエスの道徳なる教と他の総ての道徳なる先生達の教と比較すれば主イエスへ來る人はその教の幸ある結果を受ねばならぬ筈でございませぬ。約翰傳六章五十七節に曰く生る父我を遣はす父に由て我生るごとく我を食ふ者も我によつて生べしと。終りにのぞみ更に壁を以て申しまするが駿河國の富士山を御覽なさい。彼の山は晴れたる日にてもまた陰りたる時にても極めて麗はしき景色にて麓より絶頂まで誠によく釣合て居りましてその周圍の景色は全く忘れてしまひます。されば富士山とその周圍のものと比較するときははるかに富士山の優りたること分りませう。總て富士山の近所にある山々は何れも高きに相違あしといへども富士山に比ぶれば恰も坂か或は丘のやうなものでございませぬ。そして雲のたなびくとき

も他の山の頂上はすでにかくれてもひとり富士山は兀然として半腹の上をあらはして居ります。嘗て信州淺間山へ登りたことがございませぬがこの山は七十五里四方位は眺望することが出來ます。而してこの山の近所にもまた高山が澤山ございます。けれども淺間の絶頂に立つときは雲ははるか下の方に縋引いて居りまして多くの高山は皆雲の下とありて見ゆません。たゞ富士山のみ遙か遠くに聳ゆるのを見る。ことが出來ます。且富士山は遠く見るも近くよて眺むるもその形は少しも替りませぬ。古人の歌によみたるごとく實に晴れてよし。陰りてもよし。富士の山元の姿は替らざりけりといへる通りでございませぬ。たとへど我々人間の救主ある主イエス、キリストの性質と比較するに誠によく似て居ります。福音のキリストと他に一番すぐれたる人間と比較するに恰富士山の他の山々に於るが如く。逆も比較物にはあり



## THE ATONEMENT.

The chief sources of this fourth tract in the series, are a monograph entitled "Thoughts upon the Atonement" by Rev. Dr. Goodwin, late professor in the Protestant Episcopal Divinity School, Philadelphia, Penn, and the well-known work on Systematic Theology by Rev. Dr. Knopp, of Halle Univ., Germany.

The whole subject is treated entirely as one of revelation and no attempt is made to reconcile what is contained in the revealed word with the advanced thought of the day.

To those unacquainted with the two works above named it is sufficient to state that nothing in this tract is, we believe, inconsistent with the well-known book "Dale on the Atonement," though, of course, it is wanting in the exhaustiveness of that treatment.

### イエスキリストの神性終

ません。若も我々が造り神を想像しやうと思つても。キリストと同様な  
る神は迎も人力では出来かたう思はれます。唯々福音に書てあるキリ  
ストの性質は。萬事釣合て出来て居りますから。我々は能く精敷調べね  
ば。その性質を知ることが出来ません。



#### 第四

#### 贖の問題

本冊は重もにフィラデルフィヤ監督教會神學校教授たりし博士グー  
ドゥイン氏の贖罪論と獨逸ハルレ大學博士ナツフ氏の有名なる組織  
神學に據りて立論せり。

此の問題は徹頭徹尾之を默示とあして論述せり聖書に含める思想と  
新神學の思想を調和せしむることは一点なもなざりき。

前記の二書を知らざる人の爲めに一言したきことあり。うは本冊の論  
ずる所勿論有名あるドールの贖罪論の詳密あるに及ばずと雖論旨に  
至りては矛盾する所なしといふこと是なり。



## 贖の問題

アンブラー述

只今より少し以前のことでありましたが或る有名なる人が神の性質、および聖書と未来の生命との個條を論せられたことがございましたが大方は臆説でございます思ふにその人はその臆説のみを基本として、キリストの教義を確信したものと見なします。今私がこゝに古來一般の經驗によつて鑑るにかゝる臆説を基本といたしましては逆もこの大切なる教義を確信することが出来難いものであらうと存じます。羅馬書一章を調べますに如何なる人にてても信仰に冷熱あることを明かに示されてありませうがこの信仰に冷熱を生ずる原因は如何なる故ぞといへば惡しき臆説或は空しき臆説より起るものであります。すべて臆説はかく大なる關係を及すもの故深く慎まなくてはなりません。



神の性質又は聖書のインスピレーション。或は未來の命などの事を臆  
 説を以て如何に論ずるも決して完全なる教義を見出すことは出来な  
 せん。總てのことに就て確信といふことは第一の要點でありませぬ。若し  
 この確信がありませぬ時は、宗教の上にも、道德の上にも、大に志想の混  
 雜を引き起すものでございませぬ。聖書に於ては贖よりも猶大切とすべ  
 き個條はございませぬ。故に只管にこの贖の意味を消化せば、その信仰が  
 神の御心に稱ひをなすことは、明白でございませぬ。今此贖の問題を論じ  
 まするに當つて、證據と致しますものは、新敎主義の禮拜式と、その教義  
 のことでありませぬ。殊にナツプと申す人、或るはグードインと申す人の  
 説によりまして、論ずることが尤も多うございませぬ。昔より今代に至り  
 ますまで、種々異なる説がありませぬ。昔より今代に至り、  
 神の御心に稱ひをなすれども、多くは臆説故、幾分づか、深意に背いたも

のがございませぬ。中にも或る説の如きは、贖ひの目的を全く取り誤りて  
 論じます。故に仔細にその説を論駁致しますれば、終に其人自らを贖主と  
 するに至らねばならぬやうに陥ります。先一つの例を擧ぐるに、甚し  
 きは、イエスキリストは人の罪を神に贖はすして、惡魔に贖ひたりとい  
 ふものあるに至れり。又反對者即ちソニアン派の説に據る時は、主  
 イエスは唯人を教へ、苦みを忍び、神の御心に從はしむることを勉めら  
 れたものにて、畢竟人間の道德の模範のみ標準のものと致すものなりと  
 申されました。が我々はかく一方にのみ偏りたる説に陥りませぬ。心  
 を虚しくし、氣を平にして、良心を呼び起し、眞直に柔順にして、聖書を調べ  
 ねば、ありませぬ。或る人々は、基督教をば全く、黙示に依れる宗教として、  
 聖書を用ゐず。専ら己の想像に依つて、説を立て、以て信仰を維持せんと  
 致します。けれども我々に於ては、聖書の尤も大切なることを、記臆致し



て如何なることでも聖書に照らしその教義にのみ従ひますのが當然  
 でございませす。然るに若も新しい學說に迷ひて聖書を棄て仕舞ひます  
 やうになつては夫こそ大層な誤りでございませう。其の間違つた新學  
 說は元來何處から出ましたかといふに論ずるまでもなく聖書の中  
 の或る辭から起つたのでありませう。然るに聖書の辭は覺り難くして困  
 難な所も多くありませす。故説明書に依つて彼是を参照して調べますは  
 當然のこととございませす。或説に由れば昔の信者達は聖書の中の教  
 義を委しく説明することが出来ざりしを以て今我々は單に近世の教  
 義を信せざるべからずと主張いたしまするが昔の信者も近世の信者  
 と同く聖靈の力に依つて覺りましたので同じ聖書の意味を探究す  
 るに同く熱心を用ゐ且昔の信者は近世の信者よりはるかに大なる追  
 害を被りて苦しみたることとは確ち事實で彼等も明に教義を保たこと

と信じます故に聖書の肝要なる教義を信じます心は昔も今も異なつ  
 たことばありません。惟或少しの部分のみ近頃の學者や論者に依つて  
 意味の明瞭になつた所も多くありまして従つて信者も益を得ること  
 が多ふとござりませす。

贖の教義はたゞ聖書にのみ明にしるされたるもの故これ論じませ  
 るには専ら聖書に依らなくてはありませせん。故に贖の事は昔も今も別  
 に變つたことばありません。かく聖書の肝要なことは如何に世が進み  
 ました進歩するものではありませせん。然るに往々新學說を稱へる人々は  
 世の進歩につれて昔し解釋の出來ない條も歲月を経るに従ひ明瞭  
 となる故新學說は世の進歩する道理に稱ふものと致してこれを尊敬  
 すれども前にも述べたる如く聖書の肝要な條は昔も今も異なる譯は  
 有りやう筈もなくかゝる説は固より取るに足りませせん。贖の教義は使



徒の教へたるものにてこれにつき主イエスキリストの直接の教が聖書の中にしるしてないとして之を反駁するものもありませんがよし主イエスが直接に教へませんにもせよ使徒は主イエスの死後聖霊の感化によつて贖の黙示を受けましたことは證明せずには置れません(約十四章二十六節十六節)主イエスキリストが此の大なる教義について直接にお話しあされぬとして是を信せずば彼の他の大なる教義をも猶疑はねばなりません。假令ば三位一体のこと或はイエスキリストの神性その他の如きも同じく直接にお話しあされたことではありません。何人も知れるごとく山の上の教は日々人間が生活するところについて直接の教であります。ソシテこの山の上の教も他所の教とその大なる意味に至りては毫も異つた所はございません。其差つたやうに見ゆるのは、弟子達を段々と高尚に誘はんとなされたまでにて初には、先手近い生活

上より次第々々に奥深き所へれ誘ひなされたのでございませぬ(馬可傳十三節馬太傳二十章十)其頃れ弟子達は、また奥深き意味を全く覺らざる所もありました。されど主イエスキリストの昇天後聖霊の感化によりて凡ての教義をば明に覺られました(約翰傳九章四十五節)主イエスキリストが博く教を傳へんがため。お弟子達を猶太の處々へ差向けやうとなされた時彼のお弟子達に聖霊の力を與ふべしと約束なされましたが。お弟子達は果してその力を受けられた故行く先々で證しを立てる。然も嘗て主イエスキリストより教へられたともあひ程の奥義を述べ傳へました。さらば主イエスキリストが別段贖の事について直接に話があつたとするも使徒の教によりて之を信するは當然の理でございませう。加之イエスといへる語は贖といふ意味を含める辭にて馬太傳一章二十一節にもかれ子を生ん其名をイエスと名く



べし。蓋その民を罪より救はんとすればなり。とございます。且又か弟子達か。初め主イエスに従つたのは何故かと申しまするに彼人々は、バプテスマの約翰から世の罪を任ふ神の羔を見よと教へられたるによります。約翰傳一章二十九節馬可傳十章四十五節に人の子の來るも人を役ふ爲に非ず。反て人に役はれ且多くの人に代り。その命を予へ贖とやらん爲なり云々と主イエスが直接にお話しされたではございませんか。又世を去らんとなさるゝ前に際り晩餐を施せし時の麵包と杯は贖の他に何等の意味を含んで居りませぬ。日本聖公會の祈禱文中聖餐式の聖成文を御らんなされば贖のことについての教が明に書てございます。その文に曰く我等の天の父能はざる所なき神よ。深き憐みに依て我らを贖はんがために。獨子イエス、キリストを十字架に死せしめ。また聖子は一次己の身を供へて。總て世の人の罪のために全く充足る

贖性供物となし。且我らその寶き死を常に記憶するため。再び降りたまふまでの配徴を立て之を行ふことを福音の中に。詔命たまへり云々と。是勿論主イエスが世の罪を贖ひ給ふことを教ふるに他ならざるのでございます。馬太傳二十六章二十六節より二十九節まで。又希伯來書六章一節二節等に我儕キリストの教の始を離れ死の行の悔改め神に屬る信仰萬殊の洗の禮また手を按こと。死せし人の復生かざりなき。刑罰これらの教の基は再び置くことをせずして完全に進むべしとあり。ソレテ又是より以下處々に主イエスが祭司の長の勤だの神の子の贖ひの祭々だのと説明なされました。希伯來書記者の教に依つて見ますれば。希伯來書六章一節二節はキリスト教會にて教理の骨髄とするところ。とたいいます。又希伯來書六章四節より七節までに。そは一たび光照をえ。天の賜をうけ。聖靈を蒙り。神の善言と。來世の權能とを嘗ひて



後墮落する者は神の子を再び十字架に釘て顯辱とするが故に復これ  
 を悔改めに立返らすること能はざるありとわり。又同書十章二十六節  
 に若これら眞理を曉得らせられし後亦何放縱に罪を犯さば罪を贖ふ  
 犠牲またあることありとありてたとひ如何なる不道德な生活を致す  
 もその罪の報をしるしませんのは單にキリスト教の知識の進歩を望  
 むの意味が出たるものでございまして我等は常にこの意味を味ひて  
 居ります。信仰の冷なるるときにても尤も大切なる教義を握つて進歩  
 するやう勤むるが肝要であります。聖書は我等と神との和に就てその  
 意味を述るに必先人間の罪ある有様をあらはして後神の正しい怒を  
 我々の上に加ふることを教へてあります。(約翰傳三章)  
 聖書全体の意味を合せて考へまするに我等は眞に神の正しい掟を破  
 りましたに依つて神が定めおされし罰を受けるのは當然だといふ

考を引起すに至ります。(羅馬書三章九節、十九節、五章十節)夫故イエス、キリスト  
 は神と我等とをして和がしめたるお方にて或人のいへるが如くに贖  
 は全く自力にあらずして他力であります。即ち神が我等に罪の免しを  
 與へ給へるを以てわれらは其和のしるしを受けましたので取りも直  
 さず神と人間との和は主イエスが贖主となられたによりて出來たも  
 のでこれを信するものは徒神の恵を受ける計りでなく神と和ぐことが  
 出來るのであります。抑主イエスのお死なされた目的はわれらに道德  
 の道を十分に行はしめんと思召すのみにあらずそのお死なされたに  
 依つて神に反對して居るものゝ心をもひるがへし神に従はしめ愛を  
 以て其心を結びとめ猶且全く罪の免しを蒙らしめんとお思召であり  
 ます。(以弗所書五章二節、希伯來書九章十四節、二十八節、十一、十二節、  
 約翰第一書二章二節、四章十節、以弗所書一章七節、羅馬書五章九  
 節、加拉太書三章十三節、以弗所書三章二節)何人でも主イエスの贖を信じまし



たならば必ず其愛にはだされて神と人にと對する愛が自然と其心に  
 浮んで來るものであります。去れども前にも申した通り其結果はたゞ  
 これらのことを眼目とする許りではありませぬ。全く神と人との和で  
 あります。聖公會の祈禱文中にも背くの罪人あるも贖ひによつてさよ  
 くなり神と和々云々とございます。  
 新約聖書の中に贖といふ辭は唯一のみにして羅馬書五章十一節に和  
 の意味が書てあります。が舊約全書の中には和といふ辭が大凡七十度  
 もしるしてあります。加ふるにモーセが禮式を立たした意味も矢張り  
 神と人との和を要むるのであります。後々多くの説や種々なる教義  
 が生じ互にその論を主張せんと致しますのはキリスト教の進歩でござ  
 いました。喜はしやうでございます。さりとて茲に一つの注意  
 を肝要と致します。總て如何なる教義にても全く聖書の辭に従はざる

ときは假令その議論は立派でありましても無益な冗言をいふのみで  
 あります。すべて聖書の辭を以て議論を立てますれば言ひやうは假令  
 巧みあらざるも必ず確乎なる教義とあるでありませう。兎も角も新しい  
 説を稱へ且之を信せんとするには尤も慎んでこれを聖書に照し深  
 く顧るとが必要であります。  
 主イエスの贖によりて勿論人は愛の心を引起し罪の嫉むべきを悟り  
 て援け導かれ神に近づくとを得るやうになりたるのは素より判然  
 たることであります。すけれども世の罪を任ふ神の善即神と人との和  
 をあさしめたる所の意味を信仰して其説を立なくてはなりません。聖  
 書に記されたる贖の教義に反對した説に神は常に變らざるものにし  
 て且變らざる掟を以て在す云々といひて主イエスの贖は神の御心を  
 動かす力あしとするものがございます。然らば人々がキリストに向



ひて取りなしの祈りを致しますは誠に前後撞着といはなければなり  
 ますまい。且斯様なる議論を立つるときは今日の糧を我らに與へ給へ  
 と祈る辞は如何に致しませうぞや。又求めよさらば與へられ尋よ然ば  
 あひ門を叩よ然ば開かるゝことを得ん云々。又爾等我名によりて願ふ  
 所のことは我すべて之をなさん云々。又ことごとくに祈りをし願をしな  
 どの聖書の詞も全く無益なととなりませう。實に考のない話ではござ  
 いませんか。この故に贖は神に和ぐとの説に反對するといたしますれ  
 ば又とりなしの祈にも反對せねばなりません。羅馬書三章二十四節よ  
 り二十六節までにしるされたる。ローロの説を略して申さんには第二贖  
 には買戻しの意味を含んで居ります。即ち主イエスは多くの人に代つ  
 て命を與へその贖とあらん爲に十字架につかれました。第二贖とは神  
 に向つて和ごとくにして即神の怒りを取除きて其恵を蒙らしめんが爲

であります。第三主イエスの贖は祭をせられし譯にて即ち人間の罪の  
 爲めに御自分を神の犠牲とあされました。(希伯來書十三章十四節の祭壇  
 十節等の諸説は。深むるも。又同書八章三節九章十一節十四節より二十  
 八節までには。祭司の長たるも。約翰第一書二章二節四節十節。以弗所書  
 二章十節) 第四人間は主イエスの績を信するに依りて始めて眞正の恵を  
 受けられます。即ち羅馬書は全くこの證據書であると申しても宜し  
 ございませう。何故といふに羅馬書は信仰に依つて義とせらるゝことを  
 主眼として書れましたからであります。第五贖は過去現在未來の犯し  
 たる罪と犯す罪との一切の罪を取除くものであります。(希伯來書九  
 六贖は神の義を顯さんが爲にして其血を信するもの。宥の供物と申  
 ます故に常に神の變らざる正しきこと。又罪人が神に和を得ますは。  
 贖に依るの他別に道はないのであります。猶贖が人間の罪に代りまし  
 た證據は第一多くの人間は他人の苦みによりて其身に幸福を受くる



場合が澤山あります。譬を以て之を申さば子が生るゝには必ず慈母の苦痛を経又その母の乳を吸ひ漸く生長致し後には鳥獸の肉を食つて。身体の健全を保つやうなものでございます。第二贖は身代りの意味。第三祭の意味を自然にあらはします(利未記十七)第四主イエスが十字架につきたまひし苦みについては既に豫標がありました。舊約時代の祭などは實に主イエスの贖の豫標とありてあります。これは羅馬書三章二十五節を参考して判然するでありませう。

主イエスの贖は罪の罰なりと申す人があります。今其説によるに主イエスは我らの罪の罰を全く御自分にお引受けなされたとは聖書中明にかいではありませんけれども加拉太書三章十三節にキリスト既に我儕の爲に贖はるゝ者とありてとあります。これは聖ポロが申命記から略して引用したるものでこの引用は神を指したることでありま

すが聖ポロは其一部分を引ききてイエスキリストは神の前でなく人間の前で贖はれたるものと致したのであります。夫れ神は己が獨子を贖ふものにあらず。然るに我等の罪によつての罰と主イエスの贖の苦とは丁度平均するといふものもありません。斯は萬々不可なる説であります。何とならば聖書には多くの人に代りて云々とありませ計りで我儕は單にそれだけのことを信じますれば澤山であります。そも主イエスが贖をなさるゝ爲に肉体をお受けなされしは誠に必要でありしされども贖は肉体をれ受けなされし結果のみはいはれません。勿論肉体をれ受けなさらねば確に贖をなさるゝことが出来まいことは明かでございます。又死して後若復生らざりしならば我儕の靈の復生の望を抱くとも亦出来ません。然らば如何にして我儕は救はるゝやといふに聖書を熟讀玩味致しますれば主イエスは我儕のために生れ給



ひしにあらざして。實に我儕の罪のために。お死なされたことが譯ります。  
 希伯來書二章九節、十四節、十七節に依りて調べますに。肉体をれ受け  
 ぬされし。お目的は。主イエスが十字架の上にて苦み死する爲でありま  
 す。聖ポロは。主イエスの肉体をお受けなされしと。いついてしるされ  
 ます。時は。必ず主イエスが十字架にかかりなされたとをも。合せてし  
 るしました。(羅馬書三章二五節、四章二四節、五章二四節、三章十三節、二五節、五章十節、一  
 節、以弗所書二章六節、七節より十二節まで)  
 神の子が。人間の死を自ら経験せられしについて。我儕は其貴きことを  
 如何に記憶すべきや。この議論を考ふるに。第一贖は。我儕を神と和がし  
 むると。第二神が我儕に向つて和ぐこと。(哥林多後書四節) 第三祭司 第四人間  
 の身代り 第五靈と天。(希伯來書九章二節、三節、四節、十四節) 第六祭司の犠牲。(希伯  
 來書九章二五節、五節、七節、八節、九節、十節、十一節、十二節、十三節、十四節、十五節、十六節、十七節、十八節、十九節、二十節、二十一節、二十二節、二十三節、二十四節、二十五節、二十六節、二十七節、二十八節、二十九節、三十節、三十一節、三十二節、三十三節、三十四節、三十五節、三十六節、三十七節、三十八節、三十九節、四十節、四十一節、四十二節、四十三節、四十四節、四十五節、四十六節、四十七節、四十八節、四十九節、五十節、五十一節、五十二節、五十三節、五十四節、五十五節、五十六節、五十七節、五十八節、五十九節、六十節、六十一節、六十二節、六十三節、六十四節、六十五節、六十六節、六十七節、六十八節、六十九節、七十節、七十一節、七十二節、七十三節、七十四節、七十五節、七十六節、七十七節、七十八節、七十九節、八十節、八十一節、八十二節、八十三節、八十四節、八十五節、八十六節、八十七節、八十八節、八十九節、九十節、九十一節、九十二節、九十三節、九十四節、九十五節、九十六節、九十七節、九十八節、九十九節、百節)

七普きと(哥林多後書五章十四節、十五節、約翰傳三章十四節、十六節、十七節、十八節、十九節、二十節、二十一節、二十二節、二十三節、二十四節、二十五節、二十六節、二十七節、二十八節、二十九節、三十節、三十一節、三十二節、三十三節、三十四節、三十五節、三十六節、三十七節、三十八節、三十九節、四十節、四十一節、四十二節、四十三節、四十四節、四十五節、四十六節、四十七節、四十八節、四十九節、五十節、五十一節、五十二節、五十三節、五十四節、五十五節、五十六節、五十七節、五十八節、五十九節、六十節、六十一節、六十二節、六十三節、六十四節、六十五節、六十六節、六十七節、六十八節、六十九節、七十節、七十一節、七十二節、七十三節、七十四節、七十五節、七十六節、七十七節、七十八節、七十九節、八十節、八十一節、八十二節、八十三節、八十四節、八十五節、八十六節、八十七節、八十八節、八十九節、九十節、九十一節、九十二節、九十三節、九十四節、九十五節、九十六節、九十七節、九十八節、九十九節、百節)  
 故に贖はたゞ信者の靈のためにのみ有益あるものと致し  
 ます。第八(約翰傳三章二十四節、二十五節、二十六節、二十七節、二十八節、二十九節、三十節、三十一節、三十二節、三十三節、三十四節、三十五節、三十六節、三十七節、三十八節、三十九節、四十節、四十一節、四十二節、四十三節、四十四節、四十五節、四十六節、四十七節、四十八節、四十九節、五十節、五十一節、五十二節、五十三節、五十四節、五十五節、五十六節、五十七節、五十八節、五十九節、六十節、六十一節、六十二節、六十三節、六十四節、六十五節、六十六節、六十七節、六十八節、六十九節、七十節、七十一節、七十二節、七十三節、七十四節、七十五節、七十六節、七十七節、七十八節、七十九節、八十節、八十一節、八十二節、八十三節、八十四節、八十五節、八十六節、八十七節、八十八節、八十九節、九十節、九十一節、九十二節、九十三節、九十四節、九十五節、九十六節、九十七節、九十八節、九十九節、百節)  
 向つて和ぐことは。主イエスのとりあしに依つてのみ受け得らるゝも  
 のであります。(羅馬書八章二五節、希伯來書九章二五節) 何人にて。主イエスの贖を受けん  
 と思はゞ。必ず聖靈の力に依頼するより外に道はありませぬ。(加拉太書  
 五章十六節、八章二十四節) 故にひとへに。主イエスの贖を以て我々が罪  
 の爲めに蒙る罰のゆるしを得。限りなき命の苦を免れ。未來の安心を得  
 (哥林多後書) 而して主イエスは又洪水前の人の爲にも死し玉ひしこと  
 (約翰傳八章五十六節、路加傳十章二十四節、彼得前書一章十節、十一節、十二節、十三節、十四節、十五節、十六節、十七節、十八節、十九節、二十節、二十一節、二十二節、二十三節、二十四節、二十五節、二十六節、二十七節、二十八節、二十九節、三十節、三十一節、三十二節、三十三節、三十四節、三十五節、三十六節、三十七節、三十八節、三十九節、四十節、四十一節、四十二節、四十三節、四十四節、四十五節、四十六節、四十七節、四十八節、四十九節、五十節、五十一節、五十二節、五十三節、五十四節、五十五節、五十六節、五十七節、五十八節、五十九節、六十節、六十一節、六十二節、六十三節、六十四節、六十五節、六十六節、六十七節、六十八節、六十九節、七十節、七十一節、七十二節、七十三節、七十四節、七十五節、七十六節、七十七節、七十八節、七十九節、八十節、八十一節、八十二節、八十三節、八十四節、八十五節、八十六節、八十七節、八十八節、八十九節、九十節、九十一節、九十二節、九十三節、九十四節、九十五節、九十六節、九十七節、九十八節、九十九節、百節)  
 以下、帖撒羅尼前書一章十節、約翰傳三章一節、二節、三節、四節、五節、六節、七節、八節、九節、十節、十一節、十二節、十三節、十四節、十五節、十六節、十七節、十八節、十九節、二十節、二十一節、二十二節、二十三節、二十四節、二十五節、二十六節、二十七節、二十八節、二十九節、三十節、三十一節、三十二節、三十三節、三十四節、三十五節、三十六節、三十七節、三十八節、三十九節、四十節、四十一節、四十二節、四十三節、四十四節、四十五節、四十六節、四十七節、四十八節、四十九節、五十節、五十一節、五十二節、五十三節、五十四節、五十五節、五十六節、五十七節、五十八節、五十九節、六十節、六十一節、六十二節、六十三節、六十四節、六十五節、六十六節、六十七節、六十八節、六十九節、七十節、七十一節、七十二節、七十三節、七十四節、七十五節、七十六節、七十七節、七十八節、七十九節、八十節、八十一節、八十二節、八十三節、八十四節、八十五節、八十六節、八十七節、八十八節、八十九節、九十節、九十一節、九十二節、九十三節、九十四節、九十五節、九十六節、九十七節、九十八節、九十九節、百節)  
 洪水以後の人の爲に  
 も死し玉ひしことは固より明瞭であります



## THE RESURRECTION.

It has been sought to present this last subject in as attractive a form as possible and the argument, it is believed, is as full as could be expected in a tract of the size.

Prof. Godet's "Commentary on the Gospel of St. John" furnishes the analysis by which the accounts in the Gospels are made to harmonize, and a lecture delivered in Tokyo recently by Dr. Howard has seemed to offer a model for popular treatment of a theme so vast, upon which so much has been written pro and con. Besides these sources, indebtedness must be acknowledged to "The Risen Christ" by James Baldwin Brown, B. A., for some of the matter herein contained.

贖の問題終



## 第五

よみがへりの證據

此の末冊は余の出来るだけ面白からんを期せし所にして、其の議論の如きも紙數の許せる程度に於て充分のものならんと思ふ。

余は教授ゴデーの約翰傳註解に基きて分解を試みたり。同書は蓋し福音書の記事を彼是調和したるものなり。余は亦近頃東京に於て博士ポワードの述べられし演説に模範を取れり。同氏の演説は古今に涉り群議百出の此大問題に平易の辨解を試みたるものなり。余は亦此外にゼームス、ボルドウイン、ブラウンに負ふ所あり。余は同氏の「復活の基督」より或る材料を借用したればなり。



よみがへりの證據

イエスキリストが一たび死してよみがへり玉ひしことは確實でござ  
いまして之を信仰する理由も亦澤山ございます抑々イエスキリスト  
の復活が事實ならばその宗教は固より眞實なる神の攝理にしてイエ  
スキリスト即神の獨子は全世界の人類の救主であるといふことも素  
より知れたことでございます加之大は小を兼ね含めるものでござい  
ますからこの驚くべき大奇蹟が果して事實であるといふからはその  
他聖書にしろされたる一切の奇蹟は猶更信すべき筈でございます今  
茲に復活のことを證據立するに當りて先この宇宙間に獨一ある最大  
司權者ありて人類に有益なることを御望みおさるゝといふことを第  
一に御承認なさるゝやう願つて置きます  
偕我等人間は永遠き神に對して其意旨を相通するの必用は如何ある



者なるかといふことを。考案ねばありません。先大昔の宗教につきその  
 根源に溯つて考察するに。當時既に何れの宗教にても。獨一の神のあると  
 いふことを。明に覺つて居つたものと見ゆます。その後幾多の歲月を經  
 ると共に。人智次第に進歩して。却てその單純なる志想を失ひたること  
 は。普通の歴史によくあらはれて居ります。彼の埃及アッシリヤ希臘羅馬  
 などの開化は。皆神の獨一であるといふ志想を反對に誘はれた。加  
 之その時代の哲學者は。神の獨一なることを説明して。その志想を回復  
 するの力なく。却て哲學者自身も。その迷信の中に彷徨ひました。夫故に  
 世の人々は。追々宗教上肝要なる活力を失つてしまひました。且是等の  
 國々はその近傍の小國或は小族に打勝ち。種々の財寶を奪ひ。遂に非  
 常な驕奢に流れ。争亂に陥り。その結果として。自滅亡するやうに至りま  
 した。又キリストの復活以前。是等の國にて尤も有名な人五十人は。悉く

自殺を致しました。が是より人々も之を見習ふて。自殺するやうになり  
 ました。實に文明の進むに従つて。社會の有様は日に失望の点に赴き。帝  
 王の尊さも。學者達も。雄辯家も。安心して自然の死を遂げるものは。殆ど  
 れなき様あり有様でございました。これ等の事も。畢竟眞聖ある神を知ら  
 なんだから起つたことで。當時獨一の神の思想の衰へたと共に。多神教  
 の思想が盛んになつて。人類は勿論鳥獸に至るまで。少しく異つたもの  
 は。悉く神として祭るやうになりました。  
 之を思へば。文明開化は。勿論望まじきことのやうあれども。一方より觀  
 るときは。開化は人心開發と申すものゝ。其實却て文學だの美術だのと。  
 様々の外物が。國の滅亡を助けます。アッシリヤの如きも。文明に進むに従  
 つて。人々彌々獨一の神についての思想を失つてしまひ。希臘も建國か  
 ら三四百年の後にいたり。段々と衰微に傾き。又羅馬は千二百年間の文



明も文學技術の進歩と正反對の比例を以て滅亡しました。ソコヲ萬國史を讀で見ると人間は如何なる英傑でも學者でも己が教へ導くところのものを猶己より高尚に致しますことはございませぬ。然るに主イエスキリストは肉体を御受けあされて他の教師よりも大に優りたる救主となり。總ての奧儀を御あらはしにありました。即限りあき神は人間となりて世に降り玉ひたれば當時の人間は主イエスキリストを信するに由りて取りもあはさず眞聖の神を見たのでございませぬ。而して我々は實際主キリストを見又實際キリストの驚くべき辭を聞きて之を書き記したる聖書を讀むにその辭の明瞭にしてその行の正確なるを信じませぬ。抑主イエスの御辭や御行ひが此様に神に依れることを明になされましたから。馬可傳十二章三十七節にも多くの人を喜びてイエスに聞くことをなせりとあるのでございませぬ。その多く

の人々に喜ばれたると同一の舌を以て御弟子達や又猶太人の長達に向つて。我は十字架に釘られし後三日目に復活るべし。是れ我は神より來れることを證據せんが爲なりと仰せられました。而して又復活は昔よりの豫言に稱ふことであると仰せられました。偕その豫言は詩十篇十六節に出で居ります。曰く。そは汝わがたましひを陰府にすておきたまはず。あんちの聖者を墓のなかに朽しめたまはざるべければ。ちりと。是はキリストの降世より數百年前に記録せるものなれども猶太の學者達は誰一人も此豫言は來るべきメシア即救主を指したることを疑ふものはなかつたでございませぬ。キリストがこの豫言を引用したまひしときも此人は眞のメシアなるや否と疑ひたるのみでございませぬ。聖ペテロは使徒行傳二章二十七節を猶太の學者達などに引用して主イエスの職分はメシア即キリストであると論ぜました。又主イエスは



復活について屢々御自分のことと大昔の預言とを比較なされました  
 (馬太傳二十三章二十八節、二十九節、三十節、三十一節、三十二節、三十三節) 實に十字架にわけら  
 れた前後に至てから尤も多くりの預言が明に成就致しました假令ば  
 馬太傳二十七章一節より十節まで及び撒加利亞書十一章十二節、十三  
 節などの鞭うたること馬太傳二十七章三十節、三十一節、三十二節、三十三節、詩二十二篇  
 五十三章三節、約翰傳十九章二十三節、詩二十二篇十八節、二人の盜賊と共に十字架に掛けらるること馬可傳十五章  
 二十七節、以賽亞書五十三章十二節、富る人の墓に葬らるること路  
 加傳二十四章五十二節、五十三節、以賽亞書五十三章九節、醋を飲せ  
 らること馬可傳十五章二十三節、詩六十九篇二十一節、十字架か  
 ら下さること約翰傳十九章三十一節より卅七節まで輝きなるよる  
 がへりと天國に昇ること詩十篇十六節、二十二篇二十二節、約翰傳二十

章十七節、是等の預言は皆この事の成就せられた以前の故尤  
 も大切なる事柄でございませす又主イエスの世にお降りおさるゝ望ど  
 その事實とは二つながら歴史にあらはれてあつたものでございませし  
 て學者達の説にも新約聖書の歴史と普通の歴史と参照する時は殆同  
 様であるを申しますソマデ尤も驚くべきものは悉く事實が預言に稱  
 つて成就して居りますのばた々特キリストの外前にも後にも如何  
 なる宗教の元祖にても又英雄豪傑の人にても決してあいこととでござ  
 います簡様な議論は能く人々の承知せる事柄故今こゝに事々しく論  
 ずる必要もござりませんからこれらの説は暫く措きて惟福音者の説  
 と聖ポールの説とを對照せてよみがへりに反對する所の説を簡短  
 に説き摧ませう此説は有名なる注解者ゴター氏に依る所が多ふござ  
 います



第一約翰傳には主イエスが復活の後あらはれたまへることを三度までしるしてございませす。即ち約翰傳二十章十一節より十八節までのマダラのマリヤ又全二十章十九節より二十四節までの十二の弟子達へあらはれ玉ひしこと。又全二十章三十六節より三十節までのトマスにあらはれ玉ひたることとでございませす。又思ふにこの外勿論キリストのあらはれたまへることを約翰は確に知つて居つたのでございませす。即ち約翰傳二十一章一節以下にガリラヤに於て現るゝことに就て記してありませす。併ながらトマスへ現はれたることは福音の目的の終りでございませす。何故といふに福音の眞誠の目的は約翰傳二十章二十八節二十九節でございませす。

第二馬太傳には二度あらはれたまひしことがしるしてございませす。即ち全傳二十八章九節に猶太國に於て女達へあらはれたまひしとある

は約翰傳三十一章十一節より十八節までに記されたる。マダラのマリヤに現はれ玉ひしことと同二でございませす。次に主イエスがガリラヤの山で十一人の弟子達に現れ玉ひしことにてこの山は豫て約束したまひし場所とでございませす。主イエスはこの山にて彼の十一人に向つて天國へ御昇りなさるゝことと自ら萬物を支配なさるゝ御權力を御現しにありませした。又馬太傳二十八章十八節より終りまでの話は馬太福音の終章にして主イエスのメシアたる位格を御あらはしにあらはつたのでございませす。

第三馬可傳十六章七節には主イエスキリストが御弟子達へ復活の御約束を爲されたことのみしるしてありませす。而してその十六章は馬可が悉く書きたるものでないと思ひませす。この章は決して馬可が記したものでないといふとは後來一般の學者が稱ふる所にして多分他人が



路加傳約翰傳の中より引きて書き足したものでございませう假令ば  
 マグダラのマリヤにあらはれたまひしこと(馬可傳十)二人の御弟子達  
 にあらはれたまひしこと(馬可傳十六)復活の夜御弟子達へあらはれた  
 まひしこと(馬可傳十六)等でございませう  
 第四然るに路加傳を見ますれば二人の御弟子達にエマナといへる村  
 へ往きしに其路にて(路加傳二十三)ペテロへあらはれたまひしこと(路加  
 二十四章三)復活の夜御弟子達へ現れたまひしこと(路加傳より五十四節まで)  
 がしるしてございませう

第五哥林多前書十五章三節以下を調べまするに聖徒ポロは他の聖  
 徒達より聞受けたる説をばしるされました先第一に復活の後直にペ  
 テロ及び十二の御弟子達に現れたまひたること次に五百人の兄弟に現  
 れ玉ひたること次にヤコブ及び總ての御弟子達に現れたまひたること

と又ダマスコへ往く道にてポロ自身に現れたまひたることが記録  
 してございませう此のポロの書と福音の部分とを對照するに元來ペ  
 テロへあらはれたること外の御弟子達へ現れたることとが路加傳  
 約翰傳にしろしてありませうけれども五百人の人々へあらはれたまひ  
 しことは福音の中明に記せし所は更に御座りません然れども馬太傳  
 二十八章十六節以下にガリラヤの山にあらはるることとがございませう  
 ことへ主イエスは御自分に從ふところの總ての人々を招きになり  
 ました(馬太傳二十四章二十八節)併しなから馬太傳にはた十一の御  
 弟子達のみへ語りたりとございませう又雅各にあらはれたまひしこと  
 は聖ポロのみ申しませうが使徒行傳一章十四節を參照せば明でござ  
 いませう總て弟子達へあらはれたまひしとは何れも昇天の時でござ  
 いましたその時にハトマスも外の弟子達と共に集つて居りましたが



是より以前に現れた時は、トマスと共に集つて居りませなんだから、主イエスを見る事が出来ません。然るに聖ポーロの書、約翰傳路加傳などに、第一第二の事は記してござりません。是はどふいふ譯かといふに、マгдаラのマリヤと二人の御弟子のことは内密の事にて主イエスが公に撰びたまひし證明人ではござりません故に、聖ポーロは別にそのことをしるさないのでございます。(使徒行傳一章二十一節二十節)この種々なるよそがへりの説を、彼是吟味致すに、尤も確實に承知すべきことが十ヶ條ほどござります。それは第一復活の朝墓所にてマリヤへあらはれしと、(約翰傳二十章九節十八節)第二復活の晩エマラの路に於て二人の弟子にあらはしこと、(馬可傳二十四章二十四節以下)第三復活の後、ペテロへ現れ玉ひしこと、(路加傳二十四章三十一節)第四復活の夜トマスの不在中に、十一人の弟子達へあらはれ玉ひしこと、(馬可傳二十六章三十四節)

六節以下、約翰傳三、第五八日の後トマスにあらはれたまひしこと、(約翰傳十章十九節以下)第六ガリラヤの海邊にて七人の弟子達へ現れたまひしこと、(約翰傳二十一)第七ガリラヤの山に於て五百の弟子達へ現れ玉ひしこと、(約翰傳二十一)第八ヤコブへ現れ玉ひしこと、(馬太傳二十八章十六節以下)第九昇天の時、(路加傳二十四章五十一節)第十聖徒ポールへ現れしこと、(哥林多前書八節)等なりとす。弟子達はキリストの復活の後の出來事について、何れもその時日を詳細に記しませんが、これは自ら目前に見しことのみを福音にしるしたるもの故にして、その順序は互に異同あれども、畢竟隨意に記せしより生じた事ではございまして、時日と目的との点に至つては、更に違ひはござりません。且福音記者達は、勿論福音の尤も必要あるところをのみ記しませんでした。且批評を憚りませんから、復活の説については、尤も正直に書き付け



たものでございませう。然ればこそ或著者の説にも福音記者は魅について別に證據をあらはさんとする考は持あかつたと申しました。何とあればその時の人々が復活の説を見ること猶ほ普通の説の如くであつたからでございませう。假令ば主イエスが弟子達とガリラヤの海べに遇ひしことは驚くべきことなれども主イエスキリストとその弟子達が復活の後あらたまつた交りは實に喜ばしうございまして弟子達に於てはこのとき決して懼れも慄もございませう。然れども大ひなる不思議なることながら前にも申しした如く弟子達の見聞せしことを其ま書きました故山の上の説教又キルサレムへ旅行の途中にありたる如き思ひを以て記しましたので別に證據をば挙げませんけれども併し弟子達は屢見屢きとて殆常のことの如くでありました。たと太陽の光線或は春の草木が芽さす如く愉快ある幸福ある立派あることのみ

考へて居つたでございませう。又主イエスが十字架にかゝる前後には弟子達も非常に懼れ慄きました。がその以前主イエスが魅のことについて多くの豫言をなされその豫言に稱ひて魅りし後弟子達は忽ち信仰を引起しました。(使徒行傳二章十八節)このよみがへりを見てキリストの意味を極めて能く覺つた弟子達はかゝる奇蹟も殆普通の如き思ひを致しました。又聖ペテロは使徒行傳二章三十二節に依り弟子達の信仰の有様を語りました。又反對者が如何に哥林多書を駁しましたも到底ポロの眞實に之を記載したものと認めはありませぬ。ポロがその書をしたためましたのは主イエスが復活後僅々二十四年以内でございませう。それ故福音記者の魅の説と哥林多書の説とを参照あらば益々強き證據となりませう。又多くの哲學者達が魅は自然の定則に反對するを以て信すべきことにあらずと批難致します。がこの自然の定



則といふことは實に廣大なることにて限りある人間の知恵では全くこれを知り盡すことが出来ません。その定則は學者の説によれば變化し進化するものだと申します。夫れ故に能く明了したる自然の定則でも全く事實と適合はざるものが澤山ございます。けれども此定則は人々承認まして其不明のものは學者の説明を待つと申します。殊にこの點のことを疑へる説のうちには前後撞着の議論が澤山ございます。今主イエスキリストの罪のない正しい有様を考へまするに常に神の御心に従ひて完全なる道德の思ひと辭と行ひと少しも缺くることがありし故死したる後その肉体が通常の屍の如く腐敗致しませんが。天の定則に違るといふ譯はないと致さねはなりません。 (羅馬書六章二七節) 又主イエスの甦に反對する者は馬太傳二十八章十三節より十六節までに記してある所の猶太人の説を取つて議論の種といたして

の事實を捏造話とあし。イエスの弟子達が密かにその屍を盗んで不思議なる有様に見せ掛けたといひ。或は又弟子達が初めよりその復活を信せざりしが後にいたりて漸く信じたるものなれば決して正確なることとは認められぬなどといひます。併し斯様な説は根もなきことでございます。それ故に二世紀より十八世紀にいたるまではその説を賛成したものもありません。只今では斯る説は全く地に落ちて仕舞ました。ソハ何故なるかといふに甦が若し狂説ならば弟子達の信仰は無益なるのみならずその上にも弟子達がその説を傳へて徒に羅馬政府の囚人となりたり死罪を受けたりしたのは何の功でございませう。その弟子達の心中には眞實よみがへりを信仰致さねばキリスト教の信仰は立つべき筈もなく。又その議論が合ひません。斯く強き證據がありますゆゑに。ストラウスといふ人は若し復活を信せざりしならば。



キリスト教會の強き力は創に於て決して引起すことが出来まいと斷言致しました(馬太傳二十六章五十六節七十五節。路加傳一章二十五節以下。二章十四節以下。三章四十二節以下。四章二十二節二十)

又或反對者は復活を見て眞のことにあらず幻ありと致しますすけれどもこの説も亦愚なる考へでございませぬ。何とあれば葬のとき主イエスの朋友はその屍に種々な香物と藥料とを以て之を包み永く保つやうに致しました。その事柄は馬可傳十五章四十六節四十七節。十六章一節等に出て居ります。ソコでその藥料と香は非常なる重量でございませぬ。且又キリストが果して甦ることを望んだ様子を弟子達は認ませぬ。故從つて彼等が幻を見ることはあいな筈でございませぬ。今茲に幻についてその全体は如何なるものぞといふに第一幻は必ず不思議なものでその見る所の人のその時の心と場合に依つてその形が現はるゝも

の故各自見る所の有様。又形が必ず違ふものでございませぬ。第三人の身体が衰弱せし時か。又は病氣の時などに尤もよくあるとでございませぬ。主イエスの弟子達は當時皆中年の人であつてその上常に十分なる運動を致して居りました。故身体は皆強壯の人でございませぬ。第三幻には不思議なる形を見るものなれども主イエスが甦の後の行や群などは左様なることはございませぬ。(馬太傳二十四章二十七節以下。路加傳十一章二十一節以下。約翰傳三章第四十四日の後に至り。主イエスの現るゝ事は全く息みまされた。さればこの事實と幻なるものとを比較るに全く異なるではありませぬか。)

又反對者の論に主イエスは眞實に死なざりしに依り墓の中に葬られた後、香料又は藥種の香氣を嗅ひて遂に甦つたと申しますが主イエスが既に十字架の苦楚を受け餓疲れたる上、兵卒の爲めに鎗にて心臓を



で貫かれて血と水とが流れ出たこと故この傷所は死より外に道理の  
 さいことは明てございませす(約翰傳十九第一章一節。馬太傳二十七章二十六  
 章二十六節。約翰傳十九第一章三十一節。路加傳二十三章二十八節まで)且主イエスの屍  
 の周圍には百斤以上の香料や藥種が詰込んでありましたから其重さ  
 ことも中々容易のことではありますまい。(約翰傳十九第一章三十一節。路加傳二十三章二十八節まで)三加之羅馬の  
 兵隊はその墓の口元を警護致しました。(馬太傳二十七章二十八節以下)斯くの如き有  
 様故主イエスが逃れ去りてエルサレムから來る二人の弟子に遇ひ或  
 は現はれ或は隠るゝが如きことは逆も出來さいとでございませす(路加  
 十四章十三節まで)  
 又如何なる反對者にても羅馬書加拉太書哥林多書等は皆聖ポロが  
 眞誠に記した者と認めばありません。さて是等の書は確に復活の後二  
 十五年以内に書たもので加拉太書一章十八節十九節に聖ペテロや聖

ヤコブ等はは聖ポロと親しく知り人にして且その二人の弟子達は  
 主イエスの復活をも實見したものであるとしるしてあります又これ  
 らの書には若し主イエスの復活が譏談ならばキリスト教の説は悉く  
 無益であるとございませす。殊に聖ポロが餘程年老ひたる頃聖テモテ  
 に對してこの力ある辞を用ゐました。提摩太後書二章八節に。ゼビデの  
 裔より出たるイエスキリストは我が傳ふる所の福音の如く死より甦  
 りたることを爾心に記べしと申しました。御承知の通り。聖ポロはそ  
 の以前キリスト教に反對する學校を卒業致したもので。キリスト教  
 に對しての總ての議論は誠に能く知つて居りましたけれども。キリス  
 トを信じましてからは。毎に主イエスのことゝうの甦りのことを主とし  
 て説教致しました。その上然も之を信する爲に。肉体上尤も離れ難さい  
 關係をも塵の如く打捨て仕廻ました。(三排立比書八節)



又聖ポロが羅馬猶太希臘の三州に跨つて主イエスの甦を證據致し  
 ました時人民は互に相争ふ様子でありました。そのうち之を信する  
 人々は忽ち連合して睦じく團結致しました。假令は聖ポロが歐羅巴  
 へ参りました時猶太人とギリシヤ人の中には頗る不和の有様であり  
 ました。が聖ポロよりキリストの甦しを聞て悔改めた希臘人は毎週  
 金錢を集めて之を貧困ある猶太人に與へました。(羅馬書十五章十一節。哥林多前  
 九章十一節。)聖ポロが羅馬帝國へ参つた頃はその國の人民は戰闘  
 を好みまして惟その事にのみ心を用ゐて居りましたから。田地は悉く  
 野原の如くに荒れ果て。そのうへ大飢饉と流行病とで大層なる困難  
 の中にありながら國民はこれらのことを事ともせず。徒不品行にのみ  
 陥りまして。羅馬帝國は今にも滅ぶる計りの有様でございました。然る  
 にこの時聖ポロは主イエスの甦を説て次第々々に改良に誘はまし

た。故信者は追々増加致し。その風俗大に革りました。から聖ポロは聖  
 書にその因縁を記しました。(羅馬書十四章。加拉太書二章。帖撒羅尼迦後  
 章。)聖ポロは斯く改良の結果があらはるゝに従つて主イエスの甦  
 が彌確なるものであると益々熱心に證據立て説教致し。死する際にも  
 聖テモテへこの事を教へました。(提摩太後書二  
 又或人は全く反對にもあらざれども學者を氣取てキリスト下教に従は  
 ぬものもあります。が弟子達は此等の人々に向つて専ら復活の道理  
 を説き人間はすべて我儘氣隨なるもの故。その有様を棄て。罪の世よ  
 り新に生れねばならぬと教へました。キリスト教は自ら原教といふべ  
 きものにて。其言行は人を感動すべき神力を備へて居ります。他の宗教  
 の如き例令は回教にせよ。儒教にせよ。又釋教にせよ。原より善教を布い  
 たには相違ございせんが。只善教といふのみにして人を感動させる



活力がございませぬ。且キリスト教は他の宗教と異りて自力ではなく、但主イエスの復活たる力にのみ依るものでございまして。主イエスの行はその言辞よりも猶權力がございました。復活も亦之と同じくまことに權力のあることにて、福音の總ての權力も亦この甦の中に含んで居ると申しましても過言ではござりませぬ。(馬太傳十六章二十六節。約翰傳。使徒の尤も大切なる教義は即ち復活のこととございます。ソコデ人々主イエスの復活を一度信じてから後の働きは必ずその以前と全く變つたものとなりませぬ。使徒行傳一章二十二節。四)又福音を深く考へまするに、たゞ教の議論のみでなく、實は生るキリストを描いたものであります。福音の生きたる。このキリストの一代記と或る他の英雄豪傑の一代記と比較致しまするに、福音中一代記の委しきことは、他の如何なるものにくらべても決してくらべものにはありません。

せん。殊にキリストの復活は神爲の事實にして、聖書に適合ふことは驚くべきことであります。(約翰傳二十章三)とふして復活の説が若し偽りあらば、福音の他の部分とその意味が全く違ふでございませう。又使徒はキリストの復活を事實とせず、只一の教義として熱心にこれを主張したあらば、彼等は素より偽証者といはねばなりません。(哥林多前十五章十六節)尤もイエスの復活は使徒の想像或は詭言より起りたるものならば、直にその説を排撃ことが出来ませう。又使徒の説が只罪より清潔ものとなるの比喩のみでありましたならば、彼等の信仰は決して一生涯保つことは出来なかつたでござりませう。然るに只管その信仰を生涯保つた計りでなく、非常なる水火の難をもこの甦を信するが爲に、少しも憶せず耐へしのだでは御座いませんか。又眞誠に能く彼等はナザレのイエスは、生る神の肉体を受けたる道と信じました若し、また甦



が偽であつたならば。エルサレムの人々は如何に力ある反對説をもその當時のことでございすから。容易く主張ことが出来ましたらう。然るに左はなくて。反つて多くの人々が。魁を信じたではございせんか。加之。魁の説はエルサレムから燃上りて。すべての國々を照らし。下等の人より上等の人に至るまで。男女を分たす。老幼を論せず。眞實を以て聞くものは。皆悉くこれを信ぜ。且猶今日に至るまで。益これをして。少しも惰るとはございせん。蓋し斯く批難の説の紛々とするのは。アポストロに至るところ。死人を甦らすこと。イエスの魁を説て。非ある人民の哀むべき有様を。能く善良に誘ひましたから。その勢の盛なるを見て。嫉める輩が。天下を乱す人ありと稱へたからでございす。(使徒行傳六節。七) 儲キリスト教の最初は。僅に百二十人の信徒のみであつて。實に微々たる有様でございした。が。(使徒行傳。一) その後。魁のときは。羅馬帝國

を押貫して。獨乙國に入り。益々傳播して。終に西洋各國の宗教となり。更に進んで。東洋へも。その聲音が響くことゝありました。(哥羅四節。三) 爾れ故に。主イエスの魁は。眞誠にキリスト教の土臺でございまして。其他總てのことは。皆その枝葉でございす。即ち使徒行傳二章三十二節に。嗚呼。神はイエスキリストを死より甦らせ給へり。我儕は。みよその證人ありとございす。故に。我々どもは。このことについて。尤も心に掛けねば。ありませんと存じす。

よみがへりの證據終



明治二十八年五月廿二日印刷  
明治二十八年五月廿五日發行

編輯者

本

多

庸

一

東京府下南豊島郡澁谷村  
一番地青山學院内

印刷者

小

方

仙

之

助

東京市麴町區有樂町三丁目  
二番地

發行所

メ

ソ

ダ

ス

ト

出

版

舍

東京市京橋區銀座三丁目  
八番地

印刷所

青

山

學

院

實

業

部

東京府下南豊島郡澁谷村  
一番地



